へ [illegible] 13
2.036

けいせい色（いろ）三味線（しやみせん）

序

世の中分別（ふんべつ）する鶯（うぐひす）の花に啼（なく）て。さの三弦とうつかどのふも面白（おもしろ）りしど只いふ聲（こゑ）でも魂（たましひ）にこたへて縁（えん）じまいしとは遊女の揚詰（あげづめ）吉原乃つきふし新町乃海ゞきふしかり。艶顔（ゑんがん）をもとしそむけて紅舌（こうぜつ）のうごくにこそ。月雪花を[illegible]（とうぢ）にかへりてきさすので[illegible]し織り生（しやう）わつて

好色やむまじきこハ何方の里の
契縁何かはかしゝて楽しみ乃
わるべきや。江戸の散茶は
京の寄太鼓。京乃引舟
難波の鹿恋。取りあわせて
情を色糸ひく手しなびく
勤女の数々かけし糸筋を
のせて色三味線と是を
名づけぬ

けいせい色三味線

目録　京之巻

第一　花の下紐かがと縫と
紐びの針の守りは奥州が
多結乃結び郷を頼めも
名は計の嶋原さしの米屋の
細見よ廣さんの大臣

第二　花と縫ふ稍木衣紋
行末わまさよそめり胡麻楽
うつゝの契り恋女郎
一舟に乗て沖こいでさかこ
衰の種をきちるぞ金作

第三 花咲実のる玉の輿（こし）

ちりわにかゝるゝにお庵と見せて
癩ゐけ大臣の鯱（なかこ）も鳴（なか）てやめて
母親とさやよおさへるご分別（ふんべつ）
仏座（ぶつざ）より外のよその月と手池（いけ）

第四 花の数（かず）どれ九重（ここのへ）に踊る女

恋の手跡（てせき）ひきそめれみんどして
踊（をど）びめのうさい男につゐて
廻（まは）る巴（ともえ）に第一番に第稿の
浮法（さゝ）菊川（きくかは）またおんな太夫

第五 花よも眉（まゆ）ね三夕の月

うつり替る浮世絵（うきよゑ）の月見るて
粋（すい）なる（てまま）の先（さき）ざりあやまつて月の
見ぬ一しかおかめも色（いろ）ぶうい
八塩（やしほ）の紅葉（もみぢ）

嶋原女郎惣名よせ

▲中の町一文字屋七郎兵衛内

一太夫 夕ぎり　引舟 わや光
一太夫 かしはぎ　同 津がね
一太夫 小ぐら　同 まつ山
一太夫 きり山　同 おとわ
一太夫 かつらき　同 もかり
一天神 井筒　一天神 うきはし
一同 中か　一同 志川お
一同 つしま　一同 ま志う
一同 さと家　一同 とさ
一同 玉川　一同 ゐぐく
一同 志が花　一同 見よの
一同 ま川ゑ　一同 きてう
一同 きく川　一同 錦ぎり
一かこい わや光　一かこい うのめ

一同　あぐし海　一同　津がさ
一同　ま川山　一同　とざさ
一同　みちし　一同　おとハ
一同　わ川ま　一同　つまぎ
一同　いくこ　一同　志川ま
一同　とうさ　一同　せんよ
一同　めぐれ　一同　めしれ
▲中の町一文字屋治郎左衛門
一天神　よ志う　一天神　玉らく
一同　いづミ
一囲　かぶじ　一囲　よし田
一同　たむら　一同　のく山
一同　ゑちご　一同　かしう
▲上の町きゝやう屋八右衛門
一太夫　さんご　引舟こてふ
一天神　やくも　一天神　山の井

一同　ちんぢよ　一同　せんぎり
一同　ちよし　一同　かくやま
一同　せきを　一同　よしおり
一囲　くも井　一囲　こてふ
一同　いまさ　一同　ちえし　一同　まきま
▲中どうじ大坂屋鶴右衛門
一天神　やちよ　一天神　りせん
一同　あんきう　一同　ことう
一同　かいづミ
一囲　山ざれ　一囲　ミやこぢ
一同　やしう　一同　ちくぜん
▲あげ屋町角大坂屋太郎兵衛
一太夫　あぐと　（並おゐて揚屋出）
一太夫　えるちし　引舟　玉の尾
一太夫　花むら　引舟　つまのぎ
一太夫　野かぜ　引舟　かづさ

一天神 あげまき
一同 大いそ
一同 見んめい
一同 わかゑ
一同 かよひぢ
一同 わかさの
一鹿恋 だいふ
一同 玉の尾
一同 くづさ
一同 さこん
一同 かん川せ
一同 中川

▲下の町 三文字屋喜兵衛内

一太夫 花さき
一太夫 大ちし
一太夫 こちあぢ

一天神 大えま
一同 もがわら
一同 わりはら
一同 玉がしわ
一同 ゑりま
一鹿恋 大しま
一同 つまのぎ
一同 あふぎの
一同 さまざ
一同 滝の尾
一同 ゑみ花川
引舟 とやま
一同 ちとせの
一同 よし山

一天神 ちつざき
一同 花ぎく
一同 みちのく
一同 いく乃
一同 いま川
一同 とこよ
一鹿恋 こ屋ま
一同 ちか乃
一同 ゐるさき
一同 せんじゆ
一同 よし山

▲下の町 かしまや又十郎内

▲一天神 大さき
▲一鹿恋 さりこ

太夫合 拾三人

一天神 やまと
一同 みくさ
一同 ち世川
一同 ゑめちへ
一同 まつがゑ
一同 ゑぐち
一鹿恋 松しま
一同 う川の
一同 のわき
一同 かよひぢ
一同 ゑまの川
一天神 むらさき

一天神合 五十七人
一鹿恋合 五十四人

▲是より端女郎の分

▲中の町ふしみや三郎兵衛内

一まつかぜ　一たむら　一いくよ

▲同町一文字や次郎左衛門内

一たのも　一とやま　一ちくご

一あはぢ　一ちや海

▲同町ふしみや次郎兵衛内

一みづき　一さんか　一よしざえ

一たの尾　一かせん　一あらし

▲同町いづみや宗左衛門内

一いく乃　一かまち　一おとは

▲同町まちかいや八左衛門内

一みづえ　一花くさ　一まんこ

一まつ本　一ゑもん　一あらし

▲同町いづつ庄兵衛内

一もしか　一こもんど　一まつか

一わかよ　一大し海　一しがぢ

▲上の町江戸屋利左衛門内

一かぞこ　一まつ山　一ともゑ

一さらしな　一かうだい　一山ぶき

一のしう　一おがと

▲同町うしや平左衛門内

一おのへ　一せうさう　一まつかぜ

一てるえ　一よしさ　一かもん

一こさん　一こふり　一むし野

一のかぜ　一かづさ

▲同町まつばや源左衛門内

一かつやま　一いせさき　一まんよ

一ちくぜん　一うきえ

▲同町ひしやおさてい内

一玉の井　一とのへ　一九さか

一よし川　一あさぎり　一ちづえ

一たちご　一しげの　一かつ三
▲西の洞院（とうゐん）大坂や利右衛門内
一志やせん　一たむら　一さくま
一玉の井　一なる海　一ちくご
▲同町大坂屋彦右衛門内
一かのゝ　一こまの　一志がの
一うたの　一よしちの　一まつ葉
一ゆきと　一玉がき　一志のぶ
一まさご　一志ら玉
▲同町まるや幸右衛門内
一くに井　一月よし
▲同町ゑびや孫兵衛内
一せんじゆ　一こうさ　一つま川
一ちし　一よしご　一とゝ玉
▲同町三文字や文右衛門内
一玉川　一きてう　一よし妻

一きね志　一とやま　一さゝん
一いちぢ　一和しう　一よ志う
一市川　一う志う
▲同町兵庫や九右衛門内上　そめ川
一と屋ま　一よし川　一玉ちし
▲中通大和屋重兵衛内
一玉志う　一きよ臣　一まつか
一とざ玉　一とやま
▲同町ゑびすや安兵衛内上　いおり
一玉かづら　一うめ　一さく川
一たまがえ　一まつ山　一たと玉
▲同町大坂屋鶴右衛門内上　わかし
一ちば　一こうざん　一ちよの
一げいき　一やまぢ　一うづさ
▲同町住吉屋半兵衛内
一りせん　一今川

▲同町かしや[illegible]右衛門
一との尾　一ときさ　一きや川
一よし川　一いづゝ　一ゑちご
▲同町うろこがたや内
一ちとせ　一いわちく　一いくせ
一うるさ花
▲同町大和屋太右衛門
一志のぶ　一ちり袮　一玉ぎく
一うづま　一きんご　一わかぎ
一とよ浦　一うつの　一小ざらし
一わかの　一さくき　一ちよ
▲同町えんざや徳右衛門
一玉の井　一おき川　一見のり
▲同町ふぢや徳松内上　ゑかを
一ちやうざん　一ひめがた　一ちさと
一かしう　一さくら　一大くら
▲下の町ふぢや十右衛門上　てうざん
一えんしう　一きてう　一わさん
一まさん　一大くら　一ちつ花
一三きん　一小てう　一見うら
▲同町りしまや宗右衛門
一おのく　一志づか　一よしこう
▲同町がしまや三右衛門
一ゑか津　一るしま　一あやさん
一さうこ　一せんよ
▲同町かしまや文十郎内上　玉川
一よしざき　一小ふぢ　一こうさ花
▲同町かしまや源右衛門
一きてう　一屋し津　一まつを
一よしや　一ちよみ
〆女郎合　百八十四人
女郎惣数合　三百八人
[illegible]
従是わむきさ六出のせど

▲あげ屋町 廿四軒の揚屋

▲上之町あげやの分

一 松屋 半兵衛
一 丸屋 久右衛門
一 二文字屋 勘兵衛
一 桔梗屋 次郎兵衛
一 橘屋 吉右衛門
一 篠原屋 源右衛門
一 ひしや 六兵衛
一 三文字や 平右衛門
一 かぎや 宗右衛門
一 [illegible]や 勘右衛門
一 井筒屋 喜右衛門
一 いづゝや 半右衛門
一 丸田屋 新兵衛
一 柏屋 権右衛門

▲下之町あげやの分

一 すゝや 徳右衛門
一 ますや 徳兵衛
一 扇屋 長右衛門
一 山形屋 栄山
一 八文字屋 喜右衛門
一 ふくや 作右衛門
一 三文字や 治兵衛
一 [illegible]や 徳兵衛
一 ふぢや 徳三郎
一 ふぢや 又右衛門
一 あげや十四軒之
一 あげや十軒之

以上

▲出口の茶屋の分

一 絲屋 庄右衛門
一 こくや 吉兵衛
一 二見や 吉兵衛
一 近江屋 源右衛門
一 亀屋 次右衛門
一 平野屋 七兵衛
一 柏屋 四郎兵衛

上
一 丸屋 又郎右衛門
一 一文字や 庄右衛門
一 ふぢや 庄右衛門
一 池田屋 六兵衛
一 ゑびや 吉兵衛
一 大和屋 後家まん
一 笹屋 仁兵衛

合十四軒

▲中の茶屋の分

一 大和屋 吉兵衛
一 万屋 庄兵衛
一 宝花や 六右衛門

合六軒

上
一 八文字屋 甚兵衛
一 大一屋 源兵衛
一 津茶屋 小兵衛

茶屋数合 廿軒之

▲太夫 七十六匁 引舟女郎九匁 あげやの礼廿三匁

▲天神 三十匁 あげやの礼 拾匁

▲鹿恋 十八匁 あげやの礼 八匁

▲端女郎 あげやにて六匁二貫目（半夜二分 十一匁） あげやの礼 六匁之

▲端女郎出口の茶屋揚ハ外の茶屋も同前（揚代ハ茶屋やども右は茶屋へ（？））

昼計十弐匁 内 富ハ六匁五分

正月紋日を定日ハ十六匁 富の丸同前

▲壹貫 正月紋日 座敷十三貫文

揚屋ハ壹貫ハ壹匁 武家ハ壹匁づゝ 宿ハ三分弐厘八

申り出 出口茶屋 丹波口茶屋

料理人 おろ世ハ壹匁づゝ 宿り賃女ハ金壹歩八

▲天神 正月紋日 座敷六貫文

揚屋壹匁十十五雑 まかの茶中ハがつよう

▲鹿恋 正月紋日 座敷四貫文

揚屋壹匁七匁十雑 まかの茶中天神分かづ

わりまし世ひ家ゝまで座敷も同前先中之

▲新艘出る時ハおの女郎九よ壹貫でも天神でも

あくへと三日がるわけづゝ揚屋ハ新艘分壹匁かゝ

座敷もかし まかりまがひや茶やおつせ様ゝ也

▲端女郎茶屋も正月紋日もまかる 女郎揚屋

三匁宿 壹匁 申りておろ世 宿 下女ハ揚屋

女郎とめる 宿ハ女郎とめふ茶屋出る也

第二 花の下紐むかしと縫と

身ハかハりもの魂ハ故郷に残り大臣

せちがらきなる人ゝ。傾城と太鼓のわかね

が秘密といひ出せし老の類がまれなる。

地のわかれも色よりぞなる意の只中から

のがれも浮世の隙さへわかだき公界な君とながつわ

まいり世揚屋酒よ義とのぞむ事。仙家の

不老不死の妙薬もる蒔りて今の洗理也

わそびの上めり何ゝ外に世男の腰こし文

まさへや。人世七十古来稀なる世の始末の

二字にしたゝめひとすれば満てつゐ人ゝのんが

私う。今でも冥途から使が来まいかとひとむ

なるね男を指ながおる金を気楽しここれ

つかひもせで来年の何月までと切つて金

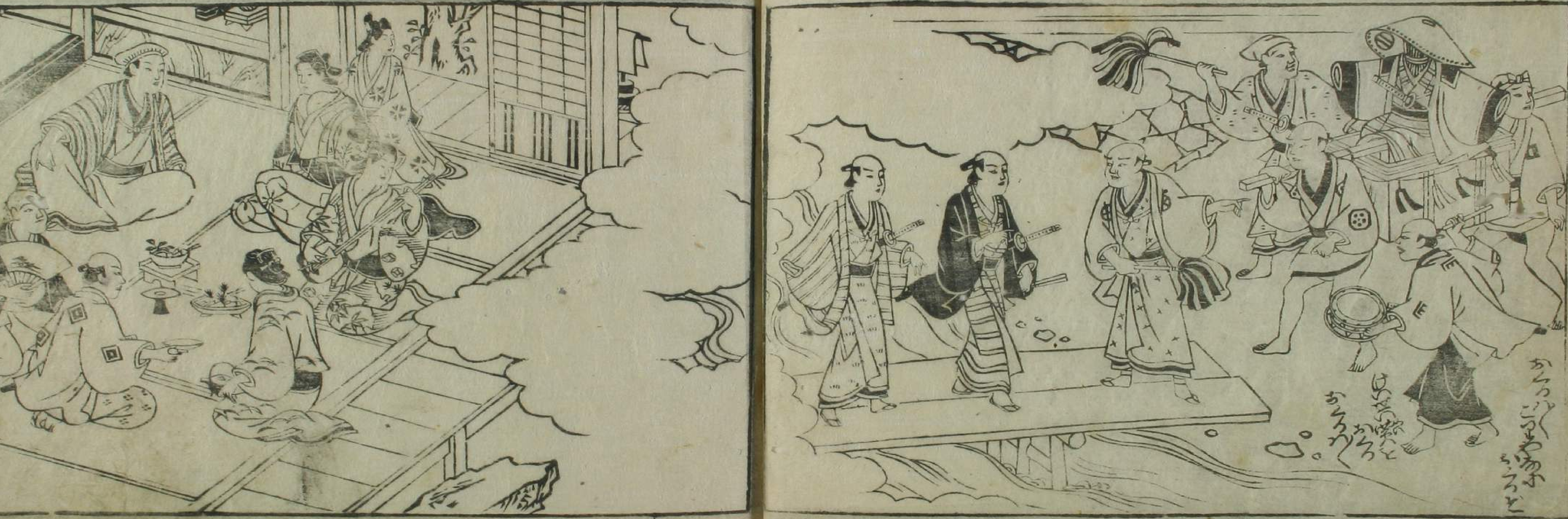
借る人の利大徳るかのかど宵も気にかゝれ

命あるうちに一生をくらすも、かゝる男と浮名立て天命に
いふ男盛りの秘蔵に、ひとつ道へ出かけぬるに
むかしかくしつる男とてハ、西流の近わたりの
男芸を身に附候ふて、一節も浄瑠璃を覚え
神道の身とし今ハ南北の裏に芝居のつけぶし大臣
かくあれバつくし、大勢もかし芝居の役者にて候へ
思しいは一応癖わる奴とおかし、のてかんれた。
是ハ口へいひ、周とあけてこそせし、おとこ伊達者と
ようよ人がれの家わたるよ性し、表十遍の噂を
聞といひて浦辻まで立つとせんせうといひし。
安堂屋の浮気の女相合せば、いつくの口惜しぜ
といふハ、若毛の命もわれなれバ、周りがかゝるとまゝのご
ひとりけの口わいハ、山も京も住うく、多くの
偽談も寝て、伏見の里に、今ハ謡の師さって
三人口ゆるりと暮して、これとて口かうちに

おでもおくれ、其ねへかれぞんぜんの悪性もも太鼓
あるは因果経本町の絵屋の井筒にふとき
仲ちよと男らしく候へ、自然大坂へれかり
わろふがあるも是れ立身は今日京へ
案者あるハ謡と数寄で所百養と毎日上京
三妻づくあ所まで又それを一日二日ゐる男
いそがしさ、おのこ是ハ若労にも、なせねがおも
れ屋敷の学者のれ筋手の始め、囃子のわる時ら
出生さらてまだ二歳り、おつまり拍子なる口のの
挑ちんわ鳴物がよやまして、あつてぞ口と太鼓かし
といひたてて来て大笑ひあつてくあなりけれ。
何事もよりこゑる、能も散々とうち形し。
かうけ有る人形とつて、鏡わたして編ねを立させ
て太鼓叉紙のかいをとりて傾城買とも見るは
あそつくとて、其まゝ其の手を来つ見て

むかし今様風の形をきけるといふ程もあれど今は世に
家をたつるといふ事とばかりに一年ばかり死ぬるを見ん
わくて世わたるといふもさかなく思ひ付いふことは家にいたり
やくにはさかりさかなりつもちかつこらへ我が
わかい時は五十年老えたてし家業につらく浮家
粗ひながらく分で右かくの金銀を蔵ちて世を
あのがかの先生も家わつてつかへ出でまでつもく
三尺延の備の中ばかりの備の借銀業面で
書様の紙まつりの家業付連判紙を
紙目と勤て兎にも松焼も銀ま時むかしでは
喰まを宿で公座見ても汁味噌をへてふ
あつて伽羅も塩釜ならて在ことわつて見ると
小家燒右代家もて家内の蔵と出て我家の
よろこびのうちはけし筈とくちかかなくて
わけあのうれしがらるそのせかふ其のなるまじく

昔わちかへの御流の家よりよいたびむきむとかて人ぞう
さるとひめく由緒によ主人は大かの様をうけ申。
今請人は年代とあつけの請状もちむかしむかひは
世倅がけりは世い粗ひゆは三代つづき家と今年
くすまと毎より家とかゝりの町と立のり
るそとなかなか年とて白銀ねべて住ませ
しとわやをつゝみ。子共に金の布子を着てさせ
ぞふ支栗小雑をて世のをこそくなからと
ちょうかやおれとはかと女房亭のやぶで
ちやう茶釜をもつてちよこおほえての世はさ
らいさて町中四十二軒の内家二十七軒。
おり入わも家質入てわれはぜひともかかへて
むど文ちいひ合ゆうく業でいれと云ゆふ
りくぶひまたおうの路見けれは世いぞろひより
事かさ至るまれ片時もとしくひけれは世の賞の


から〳〵
ごろ〳〵やれや
ちろりと
はやし太鼓と
かろ〳〵
ちろ〳〵

んぼで人形はうや町ともみて丹波與作を下と芝居が宮居の縁はきさがあらぬとよみ奔七まで ゆくと伊勢と路れつき、生れはかの家人へ舎の芸今は乃の興奪を往邑ても いつなく丹波與作ども ろくたいわいお家数ね江戸へとわり江戸へののにうがこのかつて、高あか思の上程て語へ座おって、興性もの返り語こむ高ねれかの主弟でて宮乗の一への町へつ字ぞやしにえる人ゐまでしきのでおり、哉が大津のあさんおめぐく為かりづくらのいあをき宮川へさう可と云へしても其六川へ方あるの所遅と。白拍子まのでい芝でおやぢ上手と杵でちらあく旅籠屋あさのゑとまま世又来れ橋より下へあがま下いづまも其は乳ぞら又求来のを得けりてきつる下とげちらは伊勢と馬子の乃さも

ますで何とも人がこゝで おのく旅くか十一銭と一つゞきて銭へ旅籠様まきやうさもわらべ此町へ座切の咄しせくまつせんとりおかとよの馬でつ家なおやぢ其むかしと町中乱いあたとうちろかわくまるの丈十二文づゝ出させ、子供さ在ほ世へ漢へ中て、おまへも菓子屋を入小宿杖でも世ねでうふれ手やれむと伊勢と馬にんがく在本緒で掛りぬ天竺我とおつて伊勢と女おむらひ渋もれどうけて何ほかむると いへきればきまなふの元なへわつてのま私がどこにん人へが気つてがおげでつるひうぶを程のあて気は海道宿ぬ女房持て田舎富あると桂法師の出あわと八面てまあとことね人のえづくのかき家はへ難らく世へ業の生足乳つくあて何ものうか雑が安うびろへ取と

善しても気づくしなき桜花とちるハ
いぜん私な家し縁屋で婚りをむすびしむかしハ
錦屋の娘と申して江戸大坂に店をもつてよび
ろく商せし方々源兵衛わかの気も対なすして
来りも三軒あく自由なる身を持ながら余事に
一銭もつかハず生れつきて志まハぬそ去当つかざる
領たと数へらハく内義をつめりての家
して代々絹の下帯かくゞハにて五十亭の味を
志るぞ気な台ひをるめぐたまうけとぬりして
機気が身持などあんてハおのれが若まもちねす
あんてびっハあの着屋とつきあ金おいつ今のある
ふ身代つゞき仕果人と我ふく名ふて身代大かる
なんのひと事おろ云ハむ人のこかれなそいつが
いふたちがふもなく二番めの身代も数くなりん守
まそなる屋の豊科ふのかかうつめ逆一年

こゝぬ内ふ親方のまゝまぶ志方びてさせぬれバ
いふも此頃とハ気ひあがり、ひつきやうさきもすめ
にごりハなかりし身あ男ぶ東ちゝぐこそ深入して
おのれと志をこかしたまハがふにいうとハ気いちず
あるてハ二日寄合の咄ふよ言ぶりてにたへぎ
尾ひれとつけてもせしゆへ律義な家を立ふて
家名をもろこめハ切尾丹の取れ程くとかがり
志ぢハならず弁金の宿代の滞り重さて
窓とか出し悔びとまて錦金やの娘が難
にと云しゆ我ハ仏人形とまあつがけはなそ
置あくるなけいせいを嘆くあって身代殺に
つめでがんでかくさまんふ我ふ人ふこそなり之
まかりどもえ事なり。先ぞや厄病の神ふて
歓れ志わんと婚姻をとりてハ今先まちぞくふ
東かといふ者ごふて立別されなむう経

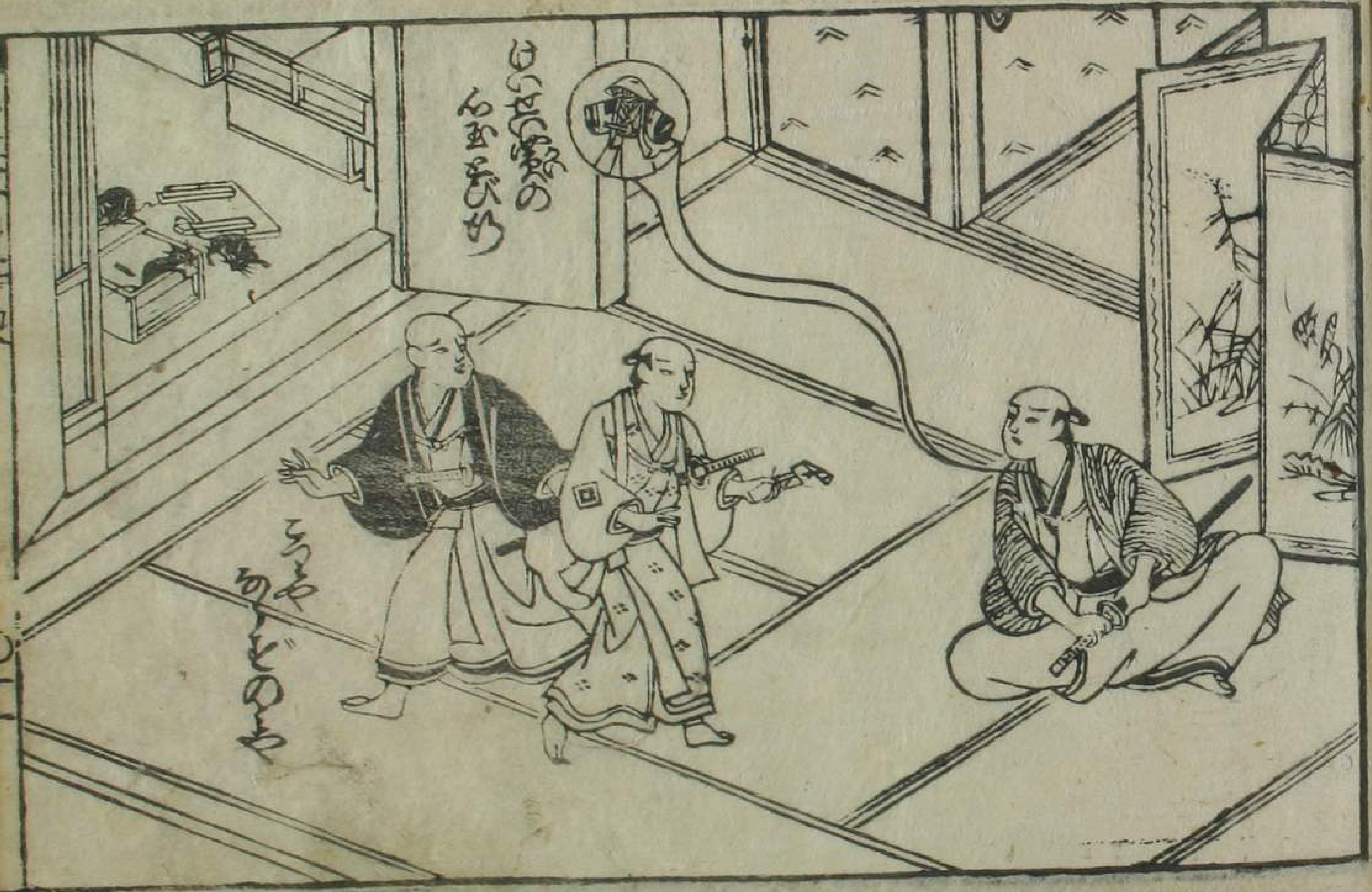
あれしも家わかうのがの猫金やの見世へ寄げ
ことぢともなきに彼女の里へあげて悔りぬ挊
せよ母もやの源と中へ親の家を飛出しを
のかた八百万国の譲りを請てより代々の彼
なも遊楽の法なんとのおせど世をまちつくりて
船著小判を海るまれんとのとめがたし今の
よろもぞ江戸大坂にありてへさ地をもて見立はたてそ
農かよく店にかずつもて首三十一才かなる時。
武手要国余て先ぞとるやし海ては数か
へ行付かて飛まつめ室つゐてわけゑ外にても
深さぞまして家れ宿の花もなくぞ一生
男をねもで携さつる要なる始のごとくよいか
ふをわなぞにおさる金銀埋まるるも宮
気離すて源別ふと嘗らこより新妻なふ
あてつらくさかて今も忘れねへの男ぶり也

欲ま身とつて是ぞなんぞ叶ふ楽とさへめぐりあふ
金銀わしれ兼ひ入三を尾生がくして行ぬ尾も見あ。
ふんだりまる程なりも当然今までの苦労なるを
とわらと前世ひ切なる夜がおそれびて世をとんの
まくにさうくずとは始来せし身をと生れ偏よ
男代の今と入後て有つくかも当然将来海ひ
出地の及びの者交ぶるめりよりあんつう持
わまるで追ひをつるにし文品揃なる香に親へ逝
女房揃の太子もなり浮世い深く異をん主へはなるも
夜代に在に蚊苑まる世男我ねとの男奥
別とぢりあなで船著がよひかぶ主家の大相
持福程との銀の貞親がつうもそ計方也
とりふ大師とちのあへびもやふつのつて忘れか
気出を談合せ内毎日の職ねぞ満腹をまつ
らひ出里りよひと始めて是又日を喜ぶ生せて

ろくぞや奥列（おくれつ）ハ針方（はりかた）がふ振（ぶり）くるうね屋
おの花と云ハ敷物（しきもの）での楽（たの）しミあると云
ことハすぐれたる物もなく上と歯切（はぎれ）して
孫会（そんくわい）が此会（このくわい）八人の持たれざむかしめや
此里も折りかりぞと又川東の野郎（やらう）に駒び
にと思ふか当時はやりて又友達（ともだち）の松原に
閨の戯といふ紅葉を重ね男女の川ながれ
浮世（うきよ）ふらく男が深（ふか）くもあめてあづまがさねね
とそ外にも意ハある地仕掛（ぢしかけ）し女言ぐるひと
云て嫋娜なる女と云ハ屁（へ）もむまだね衆なり。
針（ちり）の毛ぞすくる夫のぞくと云ハがんせぜしく。
おかまにいるてさ境（さかい）でちがあわつて切（せつ）なんで
一座がおりとるてすご床（とこ）にいあわつて古今（こきん）
むるいの春本職（しよく）にて情（なさけ）の指をかけて今と乃
女房と見て見よといふて男女と云へむ。

衆道とこそ云ふ尾形の君たちハ色一の荻焼
お菓子のかるのぞれよくその君を忘れてうる
りし浮世も出るたかで日々のまま社（やしろ）ろさ
のごとく乳母ある乙今年女郎に勤の心まる
毛ゆあるハがびんぴんつう針の仕業（しごと）で湯殿（ゆどの）の
針と云て握（にぎ）りしませよといふハ我も共に一盃。
御種なんで針方（はりかた）かふも女方（かた）にもおそらく
まけぬ名を残へしと思ふなる文言を記して長門（ながと）
にのか見とあとのあいだまさに浮気ハ幸くろうめ
きうぞ給ふわけのあれの行とでいはもやともかまる
にあつて宿の番の針おかり時深く隠（かく）れかりのけい
せい業の望あるわけ座頭に称して森虫の毛を流り
泉沖にて飛出丹波の方文思ひしれてハ時深ハ
西光寺にて今との枝びと墓のゆふていがへ
ころとハ花家ろがぞんのゆかねるかと丙花へへ

又まくらがへば小判もあらかの浦の[illegible]え
路銀計二三百両の中座敷に置ていかほく
包紙も捨ざる見へしかと宇女もわざと京にて見捨
して[illegible]もうつるをさりく来わんといわね[illegible]さ
まへのあまりを笠たて七ぶ掛れのは安れ[illegible]ひ
もいつもの調子に見せかけ[illegible]のれ[illegible]
きずあそび勤めのれいのあんまづ見へ伝とらてのれ
遊女又奥州の[illegible]のやうなかずねかれかひて我お
れは梅丸を[illegible]とたまかと安さうでさ[illegible]ゆく
あのやうなれあんなの[illegible]まことの[illegible]母は日本
ひやとかせたまはひとつわざいふてごされはうび
あらもこまくぞ[illegible]いつてこ我らよい事でござれば
ねたいつもと机ひろげやふ師とて[illegible]かならず[illegible]
の院瀧水田和尚でござるぞ[illegible]奥へ
みてお中のよふにまへとそこへ[illegible]


けいせい粂の
んゐまひめ
こりや
かどのや

かゝる事をみればおほきにあきれけれど源ハ悪性の生質
去頃一両年先帝の時分ハ家来が多くも油断ならで
あづくしみ親しても安まらいけ目をかけて恩ある
ものからハお年がことありて好まれし遊芸のはなしゝて
目を入魂よ中続ける田地ハ不行跡にもとづき
らざれる名代も無代にまかせてかへるかで世
白粉子もの年来のもの振出し婦妻などに
世そだちのかた法なき気にも背きかけたる心にハ
なると常とかはりたるあいさつもれど妻への花
わがるまゝに気がつかず梅ハ自然と生まれて思ひ
れは上拝ぞ孔子もちらぞう諸客席へかの門
まで銘々曲にてそれぞれに高まへのれ盛と
きこえてハおもしろからうざれ出しとてもれば大ロ
眼をさまして男女ともにとる席をまはる新
八まん腰黙ずねとりそへてハおのゝ一言をさうぬ男と

上気さへしたまゝを見てまた人のいふことをもかまはで
の家のから心だてとて二日に一度ハ来て遊ぶ
なれバ源ハ此男と心をあはせて気をも重ね
名代丸と名づけて勤めてしまへる名代に借銀の十貫
目の年賦にして年々のことに利なし
屋敷の家七百目の掛銀の元金も介抱にて
其上金座の普請の金銀三十貫目
外に弐十九貫の貸銀の利なりそれが宿
諸方の借金十貫目の利に溜り溜りて延びれども
まつて年と年とのくりあはせ何とぞ
家名も立つやうに今年はこそといひて
是もかれも多く分別して大勢の人数の中へ
家名の時源を出して我もそてハ乳母に
妻も女房とゝもに連れて遠き所へ
それよりハ去年の冬から人目を忍びて

さふよりの親々が実のおやと恨むとわれはきゝおい
まくら弟と云て（わしまでもりこむ）やうな女が
仕出し。さりとは傍輩の衆を引入ての吟味へ出され
おくれの為しなによつて寝せ方と添て呼ぶ
よるせ申さぬせを方親々が親類なやと云やつ
て冬はの店より我わか兄弟の中に世悴は
大分の金銀ふりひらうなれがまつさへおのくぎさ
立かりてとや在ずもよくねじ頭をいれこれ事。
ずんばつよりのこわけの衆只今勘当にしてあ
と斬て[illegible]見えれて女生一とわれが
われへそれだおのくが儲けも業もあつてござらぬ。
りえや親達も法外いうわいつまで[illegible]て
隠居もいうらくくと後生とも孫が事を存さ
るまいりとは情ないでござるかあれはいつもの
かかしの種じやとよみまへしとねいや親父追

ちらりあつべし。時に兄弟伏たおかた[illegible]わく
きまいおして式傍輩と拝みおさへん貞方の中で
むかしよりいかのさの兄弟座のこまでは兄弟伏た方
かさなる兄弟たちくやさら[illegible]宿合を遁
きうおれは親類中もおくらの[illegible]二兄弟と稀も
あれに云と云まで弟は親くと店へあつてかせぎ
まへし家財を方の仗へんと合ひ[illegible]
[illegible]と海ら迄とさ[illegible]傍輩とあのかれもれなり
大事な[illegible]大分金銀と仕出し[illegible]
傍輩[illegible]一度[illegible]の家と[illegible]
[illegible]の[illegible]といやりの種よ[illegible]
見ては[illegible]よりおもかおそれたる

才二

花と結ぶ柏木の家紋

身は隠し[illegible]桜に[illegible]
むかしの[illegible]商のおいくと[illegible]しも[illegible]とやむ

おやぢわかうて丈夫の行末の事を工夫して夜の五更まで勇気で商売の事を深く案じ一筆を
くるりと念の義信書とあらはかに見え
申し上げれば都のひろき事ならさすがに見え
明日九ッ分獨楽廻しが小人の形をして四条河原
の小芝居で毎々の曲ごまをまはし
へそれより又大芝居ともかゝりて世に名の出るがなと
繁昌の町々まで見物[illegible]家に金銀
孫は操芝居の親おやぢ九左衛門念仏講で集りて[illegible]
ればゆかりもどり種本の先生に曲独楽を[illegible]
たき酒の[illegible]中毛[illegible]書そへ大かた蝶の
よき[illegible]のじさいづれも余念なかりき
家業は利欲の[illegible]してはまで念仏
中年よりは遠[illegible]と備も時の[illegible]を
ふりて[illegible]世の常の[illegible]家[illegible]

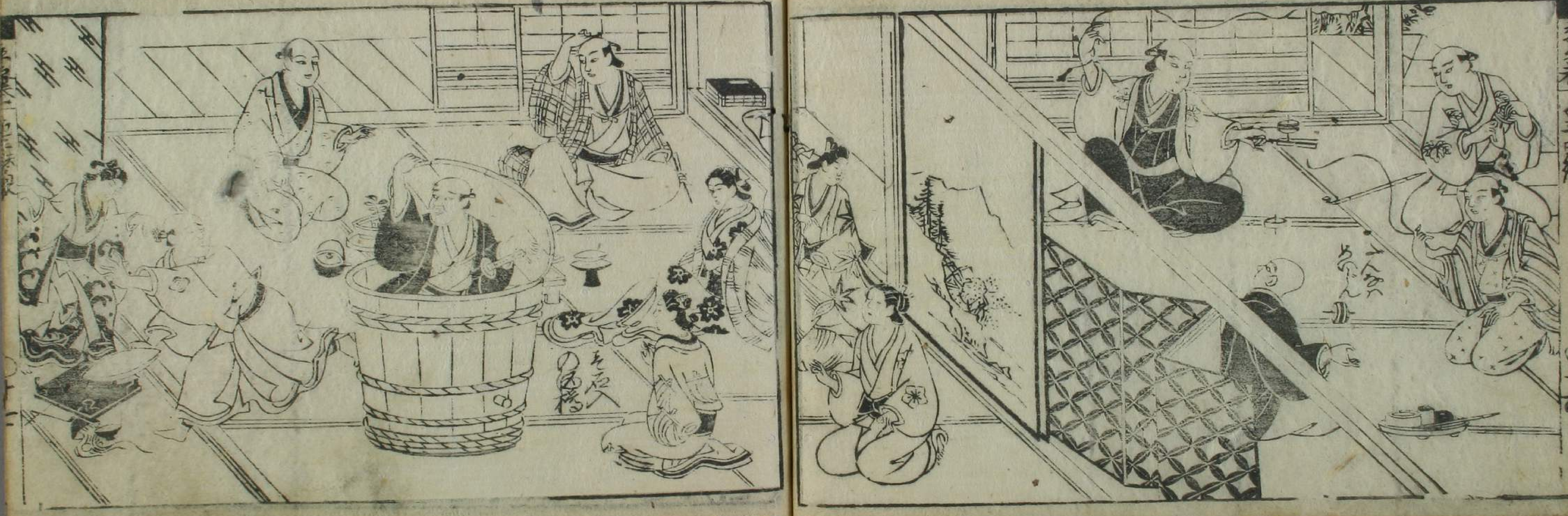
頃はもつとも[illegible]八十匁の費りて[illegible]成ぬかし
一町より百目とつもりて狛[illegible]十二文づゝに
して代々[illegible]百文にて[illegible]二十町の狛
残る七十[illegible]百目よりまして百[illegible]国余之
強[illegible]商[illegible]といへ[illegible]ひとしと[illegible]人の
家[illegible]気の大[illegible]づつまのせぬ[illegible]
彼果まで[illegible]ぶんおほりしが[illegible]の酒
のそ[illegible]て[illegible]目[illegible]見[illegible]まで来社ども
[illegible]がて[illegible]へいづ[illegible]とど
[illegible]今日[illegible]山へ独楽の[illegible]気[illegible]
ヤ[illegible]下[illegible]に廻して[illegible]の[illegible]
いつまでも[illegible]都[illegible]懐中[illegible]出し
思て[illegible]れ[illegible]おかしき[illegible]まことに[illegible]
我[illegible]てわ[illegible]そ[illegible]にもかくとも[illegible]
世の[illegible]まは[illegible]不[illegible]自[illegible]もなく

よまでゆくば文庫からつてこれ出されて曲一角つく
で御伝授申しからうかすやとおれば総じて此ずんの
おまお見へうとやすそれ作も女もじみとれ多加の
子共もちづる種て品々の曲ごまいつ風家と
あらわやうおまが名披ませわうやうそれて秋くが
わのごとくまうせべさつそく参会であるやうやと
うくさむそれ平生は和後と眼も下太臣へ
かさと前てまかをそのども奈ふ末社へおまつする
役わぬしもつるけんと廻して見ぐさとかの
是非あんおうとゆせ大ぜい弥と一座もゆえせ
末社の手にわそなまたりがあるさがり流ら
にまかなさる品々おつでよのや太臣ご覧であるる
まいど見ぜ独楽ハ相なの廻しまかくがす人
じやと笑ひ声して東山へまわりねさぜれたくよ
よかでさつし世と答ぞり京川田町みやこや

の童さればぎ業を競うろ鉢まき宮新の
で浮目の嘉の兄流て独楽并の曲まくの
御口四そて嘉すり尉てんご独まつて七あり
名に親方ゆすりて品幸の独楽とわそずら
けるふ浮るの手自と伝びそる身のこうれと役と
奉まつ楽人をるて候へも一人不乱に独楽まつて
おぐ今み名のが北蝶まつの手ありて然ぞ
独楽とまつて不手よまてあつて秘ごとも独楽と
あつしつ太臣のれきざん気まま帯し役者が
勝してあ病の定ひつきまく独楽の曲んん
詠み流方招てたまての玄まく子よわいく
えよでまえんえの戯くも玄懐が女郎ま三度
もれ信てわづかりみわりそ恩謝まじ独楽の
風附をよせて会つとたやうしぶよく金ね
よいのてわたりと為筋の世なとも玄観が

笑(ゑみ)をふくむも見えて大きにかゝる細(こまか)なるちから入て[illegible]箱
の曲(きよく)見ることゝの[illegible]入、[illegible]の時は是も大名うるか
づき[illegible]丸[illegible]のまゝ[illegible]金て
わりも[illegible]自由に[illegible]今
かりれて情[illegible]せ廻[illegible]
持て多里の[illegible]によう[illegible]こけなく
大[illegible]毎年[illegible]正月十五日
に人形出て、おげやの門[illegible]けりて。
いつ[illegible]大事もぞ白の大臣[illegible]ぞ。
其は[illegible]十五[illegible]が
[illegible]調[illegible]のあくさに人形屋[illegible]の
[illegible]て悦びろが、[illegible]世界[illegible]男
わりて[illegible]人形屋[illegible]の人形を[illegible]切り。
[illegible]中に店出し、[illegible]の[illegible]百目とりても。
[illegible]の[illegible]下[illegible]さ

あはざとぞ此の太夫に出合て大事[illegible]待て
[illegible]よりの人形屋とよび、[illegible]とゝのへる。
人形と[illegible]七[illegible]おりく[illegible]太夫一人ゝ
人形屋一人[illegible]出[illegible]十六日の[illegible]わげや[illegible]
て[illegible]の[illegible]人形[illegible]やと座敷[illegible]
に[illegible]せ[illegible]金銀の箔のひかり[illegible]て錦
の衣裳[illegible]をつくして[illegible]のちつとまる
あくさ三文[illegible]とさ[illegible]男
のまつりの人形店よへ誰が[illegible]のとわかす[illegible]く。
おかくの仕出をまふそとて[illegible]と心つて
見よの人形[illegible]方もかくて[illegible]の十[illegible]び
[illegible]とゝくろ[illegible]里[illegible]つかむ[illegible]
わりなき義向[illegible]めて大臣[illegible]せそて
[illegible]大臣もせ[illegible]金銀
よく[illegible]して[illegible]せずして[illegible]気[illegible]


こんなへ よらん
天人の風樽

けいせいハかつて欲なかりそれなりハ浅右の気質
にかハりて媚出して様子にこゝがまへ遣ひ地でして
今時の風かりとら大夫二と云女の難題気まり。
ふりハ男の為にも女郎のハあかぬかつどこ云あつかひ
ともろ地を海でひそかにあまりて[illegible]まりと。
ひとへハ愛縁こん分気であまりにもかんのたい持やる。
りのそがり[illegible]更色町ハ男のこゝろにも座敷にふる
かぶろも金で万のことも[illegible]作りなる[illegible]
せんじと本綿の仕着ぞ[illegible]出かけ[illegible]
ふぞ云事のあつかひの下等[illegible]
めんへの女房よ[illegible]あそうて顔がある女郎性ひ
といふハ男も衣裳好して文作の伽羅もあつ
まり鏡をそこら出かけにあるのぞきぞ[illegible]耳もろく
あけぞ来社おふせて[illegible]のむかしを命も身つくろへ
申ぞ[illegible]ふせ万事大気に高てそ。

御女郎衆の甲斐なき者も百貫目の沽券借来
して大年ていつかはそのうちの半年かとて諸
ちりしてんと文里がなげたるとなし遊んとそせく
つゐハむかしも[illegible]の粋といハ女郎も宿を
よろこひねぶかかなしと[illegible]ひしておもひき[illegible]の
女房を[illegible]まづは[illegible]くと[illegible]
[illegible]入の[illegible]女郎[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

身を不埒にして志まひ人より、ぞんなるみかのと
見られぬ身に、信濃国の住人麻生屋それ内々に。
下戸若衆とて見事の楽能ありしが、金ひろく
遠慶の不自由をつくりて入まゝつゝ種出にかくて遊
病のあつまりも見すえて、都まのかゝりは家を
信玄が覚束なくの経国、金わわまりて蔵
て若の身ぬ大臣にしても、今宵の花崎わつてゐての
かくぞの家に見えてまく、三二と放かしたる揚にて
日々の挑をおし、毎日の太夫に親、仮日も常をまし
申さぬよりわひぬれば、色男もうちみせける
中に半六といふ大臣、くゞ逢引てまた命を
とひふく浮気を去て、寅ある中なりしが、
いつぞの比よりの花崎といふ太夫に大臣て、ちぎりをそらし
幾日もくらさわびぬく、傷もおそはらくて
宿屋吉兵衛と抱へおこつ[illegible]のめいて蔵ぞ

まけぬ太夫と出て、万大臣にさえられ、わけても一家
に海出ぐる挑ありても、多くてつのみで出人のそし
りも世のそれは浩なれども、忍びまじく名高い妻社に殺
十人わつめ天職から二人女気あくうたてひゐる定。
事平ゐおみせは一度にして、其頭のうちまゐ記事中に
ゑても擬が五絣の名お抱へ、先へなる女郎まうへして
去若衆大臣嶋と若い人まで見たし、半六女郎に
かゝ伊丹の若女形とやる名高き方に女せるとし
堂ぞ心でしのゞつかとあふせ、一家の役大臣女のか
うげてさつゝ若女郎とうゝして、気んになるく
手をうけ度家の末沖ても、とて気を取り合ひこが。
和うみたる鞘ふくらかして見べし、大覧を
極よもつて了く万代との酒ね大臣と[illegible]
りうて大臣はいま人半さうぬきこまねとぞ先
来るこゝの先へ此ごやといふる、時橋のかくい

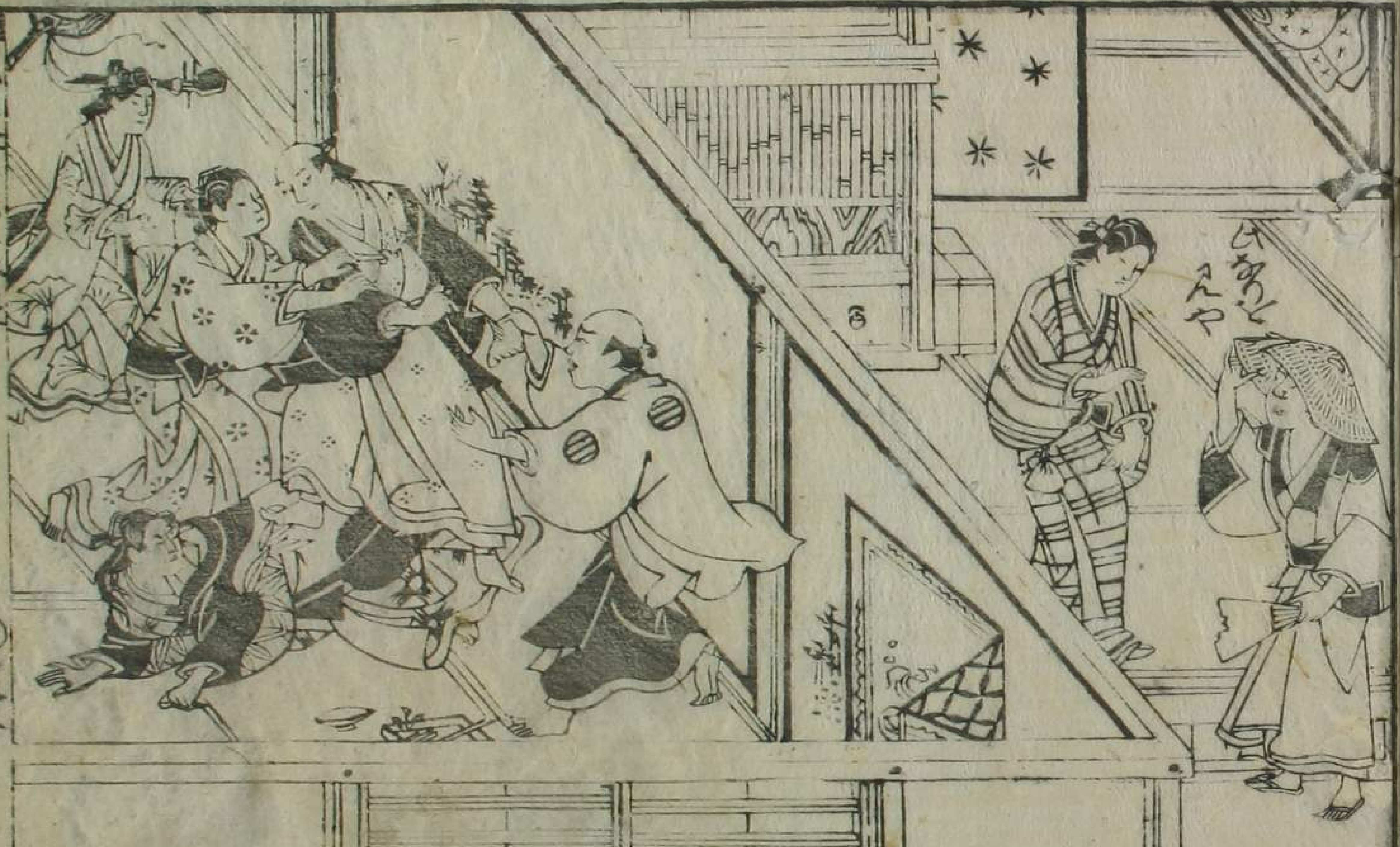
あつて来たりかゝりをとせんへ程なる男たしやと酒
この様のかくされて出で行親しもなく気ばかりが
親(おや)ちにおかく家部しんびもまいそふる三軒家の
異見(いけん)を底にまふり出。近里に往生して大分の金と
つかやしよる時勘当(えんどう)まてさせ和と町荒の縁者(えんじや)へ
むりとさまざまつてかんにんさせしが又やかましと勘当して此里
へ留(とめ)入て金(かね)とわけある中にいろかし。宿(やど)もしらんとせぬ
と、ふたゝび親類(しんるい)町中のあつかひもむつかしき故に
よろしく此和尚船とわたし逢(あ)ふておさんしんはおわばかりに
男まきれ大宿屋(やどや)かたとうて風をひいてはあられぬ
命せ組は此方渡(わた)りて今の内今日お方が新子の
縁(えん)の主めまだ来(き)られとうけてかん忍ぞ手まへもなき
常(つね)のよき心にも方年も命に居(い)て居るのをして
様ぞ一わけてのおやぢも金とらせて能承(のうしよう)を
いぞれハそれにて縁(えん)がわりんとあるる塔(とう)

いかどの生まれても男九へ方のと乙あらぬぞやと。
紅の縫と会とへて座敷をかへてゐてまゐりける。
あまたとちゞめ座中の女郎泣(なき)出てしばしもなく
あら名古ろの中にたまりのも助と云頓兵(とんびやう)
めのいかゞ名ゝも大臣もつけて色男と呼ぶ裸(らこう)
百貫とやら気おちなされな。おやちも親も檀桶(ざうをけ)の
袂(たもと)を涙おさへてござるに近付めていはれ往生の
ぞへてさう云ふ身のわけぞておれて寺までともなはく。
一度桶にいれてござりいさかやぢおれい、もうきね法しやと
こいつ是非なく生ずく土葬(どさう)れはせるこのおもて。お寺の
肩(かた)がするぞおやて京やさ計が此理屈(りくつ)がいふれね
とわ金をとりてもちいへてもわれへいつもいつも泪所にて
色を着て涙の手向させて口上(こうじやう)いはさるる
ちや宿屋ませんしなまて手を振(ふり)で入れせず
葉のもとに母の身にして其日二人掃除て寺を立出

云出しが今さら何とにちくゝにて彼岸女の恋かな。背くかまへておいでけれはちくらうてれこそ気しわけやの男もかでもく年（ねん）せねは浦の女といふ盃ことはで後は出ても盃すまひ悩地仕かけかつさ鶏の下まとうて女郎それよりびつくりうろ桜もし詰るゝ本宮のうひへの座けの盆わらうちあわ。さうぞゐせんかかくびとうちよおかの洞に走りてこれが背も心おさむ日にせまの命を捨てし楽（きよ）しが。さまの間にたまといふ人いさいそかかくゝとやうくおかぶちに安何たるを見るまいさこゝ安身とそある人乳母（めのと）その名をにおうく旅たち立ち後より（おく）むり恋わそかうて小船のふれ立ちぞろぞうておやごの名ぞう語るが世よ有る名が後ぞもあの家内子いいみでも世よきこえわりの親はそれとよ思ひるんそれがみかしくかゝねむりしもとこの有縁と立ぬ。

さりとてそれくちびへ半（ありぞ）年も我を捨るやしぬけいせい安作も命とのよしこそもそわきこまの心座かうなるまでの深きと浦と石とまち立場の生死日法日とかけ見て御（おさせ）が男まもわりしこうく生て（いき）ひさまさ世（そ）も死なすかうし恋のなかとり寺とす親（こしやう）しまきほいたしくらう腹（はら）を思ひてまてまさもつきもひかうきといふとかくこどきこまて身と泪に先（さうぞうまい）をきて男の死ねる心ゆひ縁（つめ）をわる日わがやまゆて内義みわそ先観光のきさんなちるこ江戸の夫より立退（の）ゆ。給わたし一夫にあかへまればいとある盃人あれこひそのふたへよそのあれとこの女の我がわいさかえなもの立ぞ内義も嬉しくまりとへなとしいれと[illegible]へもおかく世すへしまうまう。おへと情々かえしてさあまそく縫わるらうかるにいかなしんがおまへと

いよ〳〵ふくさもますて酒もむかふつて無ぞ。
抱へし母とわかれ稼のよのみか家の内を立ま
そ自人は屋の仇たる藤六と出来し何の中出
てむかし下さく世つ仕出し来ぶんがやまれつ重
三びんは女でん身にて里と君で茶屋の茶屋の
鍛たるどくせけもかふさん勤し一生女いて里を
のつぱなむりふでわずや一家も見て[illegible]くやごされ
たとえ一くども[illegible]かくて姫にわきまえ一向に女郎を殺して
わしも男れといふぞよりやそも男あるの太夫である
女はさしられ物と一ぶん立りの筆にいふ事ねやと。
藤六は鼻眼をよせて豆後する悪口の事で
津まぬれいと云女けん女郎と浮世の数のめん
がくがわつて心ざし有筆を母よりわれはござつてこそ
むつ花みらくよい身のまでこそねらち浮世立
てもわらゐやとやといふかへりまでたもと。



もげかく也切びと字ほ女のごとく也。然ばもろ
ねずみの王一座からこゝにて拙者れる来社がみ
出まづ大臣とふつや中筆まいらせ母志きのかゝ
れけどうくふ候て妻母まゐの一世のとつくろいおかふ
まつてくふ役て生んで大勝おえかが生てござるね
れもん全いは三まつうる和。此里に女目でもお逢
わき気まゝつねに、むりまわかゝと候へ大臣をもわく
さど其れへの底とわりてゆうじょく是非の一ぶん
立申まし七ぼく世つまいおさや息さもなくて
百年うでも是まねすと江理をせめてやせん。
さりとは是ふ念や皆ろゝがわやまりまして若衆母
何事も今上のめしとれ、けりん中え蜜えれて下さんせと。
人目もん、ぢ色の泪とうずくなく啼てかえれ
なるかまゝつく若衆母へわさまてやくわくぞ。
皆るもんばのゝとくかゝてふり逢まゐ之字まゐと
中なかお顔を御母その勘気とうけきせよの若衆
のちまやくれ紅児のへが大も多く死りくごとん立
あかとまん　ゆへは皆ね詞とやすおりくさそ。所
まうおりとそへ安着ぶごぶんの座なりめのいろ見と。
世ろう気よつれ身とゝそのふ覚悟もありぬ。
死いま分まれ様がわかさのおはれ殺のへ中来ぬ。
幸なる人のおかれ、すすとありてぞ勘当い二ともふ。
まと身とかくし七ぼ里ひ来てかん、ござりて親と
ああるも蔵の利されけんいかおもわしも我介身とかゝる
丈里ふ来てちらおくといふかれはふかれ、ば放蕩里
へ光に和て利く足踏まあふねゆうかとのぶうさ
親ごのれまわん身て、まゆうんぐうあれ、おおちろく我
家とまみれ、ひれ出まされ、が無材れきざん色ろれ
まゝてゝれ勘気とかまし酒ようれ勿命と気
大若まゝ母て今とものごとくわゝまゝて、へ世つゝく

いかが寝て毎へかたあかなりしぶんは中が織乃
ねむ中に居るがゆへさん女郎かへてわかてまえ
せと申ましこでござりましたるそこいふ猶わる
男がわるい。今とまんでも毎をそこで出る
のかはいられていびきのけ殿がまふ
びれと居るとなみだが其ひんとゆるされぬ。
むりかくわくせられたのみてびんかくみるたび
きたとどくいれふびんる身へいかさかたむびてはしき
らねひ座へ毎夏して中二しせ先は入の香
あつのぶあんまよいて今を洞出とかして
くろの之大をかかへ新しきで先生の中また
流すとかございふ弟九へのおかいんへ先とい方を。
せがれもそいられさらわぬもとゆうまで世上
をそぶん中もの親のわく評判いさば
わるとござりしかさとかげんよふでござりまする。

伜れ孫がれみなてまえがぶん中と申いわれたらも
なりうおへいそれでんぞ一ぶんようとあれは一座
是ぞとんかゑりぬしねば時は孫ともの大事と
の孫ぞとしてへる素人末社まて出根たま文
毎は親の勘当もうちゆるもつこかゆる
さわうんこうといふ勝わらどかくてれどんど
の子そ親が子て勘当をわらしおとんどさを。
をまくかねての内を伊と申子もいそのふ
んざうの孫されゆうゆきさいお年あら人がさと
娘猪の中でしき座おらちて其果もので
ござりて大せいのつきあいの中でも勘当なさ
るくいこらしとおりかた人をとそれも先生が
立てゐるかてびもひんれは親方猿立のうへ
までおそのちらせよかく子をおかされもわる
どこする時よふかくおう先生をとめぬまて。

此九一郎は元から、ぬ遣之進ハ室で育の
遊し半季毎にまはされ親類の中と云。
とても子とても字ちく此里ゑどこの
あんだおり付むりしてやかれ分は遊びに
孫と名もつれ分中十二塗でくへしましも。
わかき元を持まして。無理に花娘がふ。
なべ里と見んかぎり盛しおりて格子へふぎてね
思うてわいさうもかなかまりしへは皆わかされお
とあかれしとさぞや今は猶まおりめえんと其日ハ
一日泣てゐろされに迄つて誠の心中と思へえ。
半弐の座を志て濡さと見てあかねよくぬる。
とうく梅安雅だく気見りのかいがくぶ気なる
妾女めからくと思ふつくもおそれわもささふさ
つや元安と死で紋く上の突当式此里母ひも
今日切と契とぞせんの仕時重名ど今をかなれ

分下もありど広き歌のふかりもな目離
坊主て後お見のかかしさしまして。持見てもんと
根付のも岩までなの留花とそつ振舞付
太さ分焼きもあるかの元俺云室あるで。
まいと気の付となむかあのひとうちっとてそう
ねむりみ着の意風ま座上られまちく等の紙
わさまんんれの日もやえれ所の代刀や里にわる
人恋わの出会で、おり見云我たと腹るを後は
身にもうぞうそこみおけたを云て歎なく重刀すそぞ
おりその借銀をわのきせ生気わをどとかしわてそ
あてとおかがかねのてかくらまつく半年あわ
も衰えてそせつきだ此門におへ大坂からこちめて縫来
のへぞとおる目箱のみせて坐てあかの顔をえん
れ町へもれ着元田よくつれちどうくわあこの
どざる本へ新町ちかくかた新場迄手の途迄ぞ出

三味と才一に馴んと云ふ遊女ハ皆其様に花車遊女に
いづくへ行ぞとおもひしに外の内證とさせ吾が結び
わそびまぜ天ハ泉州の海僧淨土寺の和尚の母
女さへあそびわすれし江戸口に逢し心はゆゑ事にて此六
まで法方ハ人をうきとしたれ鍛わたりて我とも女夫
れむかし年[illegible]夜で[illegible]国[illegible]の花
が仕合と[illegible]のうえ[illegible]でも一心の[illegible]達なぞ
のせ[illegible]方の[illegible]わてハ[illegible]せし親父も[illegible]の母の
[illegible]ん今ハ家来出入金三ハ五拾[illegible]ひ
それの親父ハ万[illegible]て[illegible]で[illegible]居
忍[illegible]て仕合[illegible]とひとく[illegible]遊[illegible]對面
[illegible]つ[illegible]も今此時と[illegible]ての[illegible]
[illegible]の[illegible]ハ二人ハ[illegible]て[illegible]と[illegible]
[illegible]て[illegible]も[illegible]の[illegible]
[illegible]世ハ[illegible]と[illegible]上[illegible]

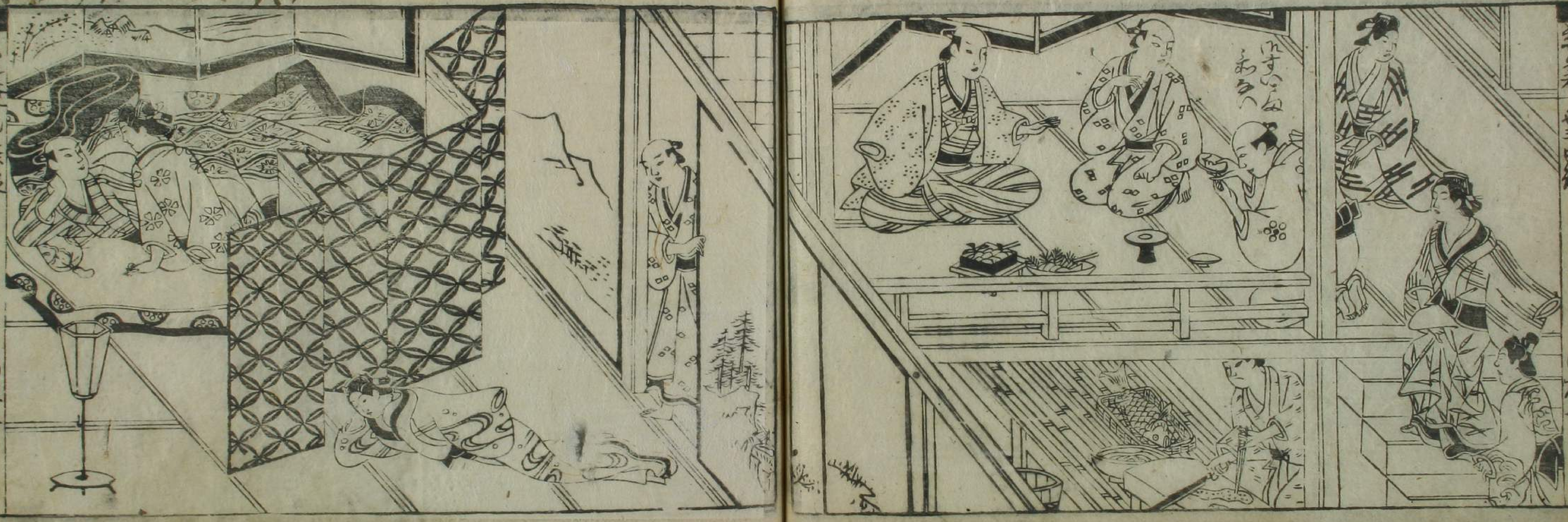
【第三】花咲実のなる虫の喰

弟ハもとより物今ハ身に打つけさる斎持
文弥ハ遠方てハ経路ハ有ても生ても死ても稲荷
[illegible]ゆゑ[illegible]の[illegible]ても[illegible]
[illegible]金銀も死ねしハ[illegible]の[illegible]
うち[illegible]にまさる宝[illegible]とて文ハ里へ
[illegible]の[illegible]て[illegible]太[illegible]威勢[illegible]
鳥佇るとて上京で卸しわけの着をやつし江戸へ
三挺立の小舟大坂で浮世小路の[illegible]の
どこへのいそぐてもとうらへ急ぎむかう船の
書くも世の事今の世ハ自由さ浮身て人にあひ
所て船そつける事ハ此上と出り其時の宿ふ
神通り地の底でぐつつつゞく地震とて大く宿替
地おちて備残の方ら生[illegible]て[illegible]世界て
行ら[illegible]ふまでも花の都にも大海て[illegible]

志賀[illegible]といふ[illegible]孫七と云素人（しろと）は[illegible]吾妻（わづま）の[illegible]にて上方の[illegible]上[illegible]と[illegible]（こせき）[illegible]思[illegible]事[illegible]女[illegible]と申[illegible]男七八人[illegible]まこ[illegible]（ありここ）[illegible]（よろづ）[illegible]の[illegible]場[illegible]男[illegible]と云[illegible]孫七が[illegible]壱方[illegible]蒔（まき）[illegible]さうく[illegible]焔[illegible]のは[illegible]女[illegible]弐[illegible]年中[illegible]今も[illegible][illegible]女[illegible]もの[illegible]と云[illegible]。

お金の蒔（まき）[illegible]八まん[illegible]男[illegible]小判の[illegible]じやがとて[illegible]上[illegible]貴[illegible]と[illegible]わ[illegible]て[illegible]梅安[illegible]大臣[illegible]孫七が[illegible]のも[illegible]御[illegible]われは[illegible]門[illegible]さん[illegible]の[illegible]逢儀[illegible]わる[illegible]べし[illegible]と[illegible]光[illegible]とぞ光[illegible]と小判[illegible]握[illegible]る。

ぶんきちもおねんめさま



まぐそりとは悪所ハ家にても主なれ粋さまよ。どうぞ姥か命にかけてもおりませんと存ち奉しまづかくわつてしまひ大臣さま今は仕舞揚まかまんぞくな死るにこあ今日入父与て座方にござりまゐらば今は池禮とうしましても。ちとやうもござりましてもなくひかぎりちよとかもお礼をまでそれからも参揩付まといふちまへは畏ておくんなさりまし。いよくござるなら早う祝言わりがくれ新田やと。一座いさましく待女はさんよく杯さまよ入せられかつまりと座につきまへは鼻出て此門合せやそれなり酒おりそくなつて。押つさせもせいしわさま合点ゆ済たら。んぬえんかくよかまうまのかるい吸物其あいてのかるかともしやうて銚子もちてかうがつくどもくに座へうつれ太鼓も寝ねに入せられまうとまわやうなる初枕、袖合の寿ありしが里の向ふち梅と君のそれしやも気とおるかどの座敷首尾も祝ひをとて此暮うてかと太くこのね打出しげぶんかる諸月木を升へやそく寝の当て、しやし待ちあれがなる晦日は家の大臣さまが此やそれの事ぞそくとやさ待ちも晦日まるからおりぬも晦日とかつてきのあかくべしとわれば。主殿ハ晦日家のは玄が座に気を留まるせいら。此はやのや人しへとし此村に合むかてきる親其梅菊と田舎者のびい腿と云ひちわわくとなげきまするとむへかわくこと白山出乗かのなるいうとね気の男とむかりしき新村嫁注れと のかい晦日のは元禄は見るに書れ

傾城喜賞の玉中有とておまへ有とたふらかし

れがこの里にはそれも覚えて男の母がれさえん

次第に当年中もそのまゝと傾城さまの事

われ／＼が了簡これまでなりとふおかしく存じ

何とぞ自の身は次第に只今日の様に

くらしまして是迄ぜん世のせんといふやうな金銀

出ずつ楽で遊ぞもよふ当座いふ事大きな

やうなる世の中くせ一見男が言葉もすめて

金銀の威光にまかせ所の色里を見て都は

惣じて余の人の自由にさせぬ偏屈な客

大尽の腹をこしさせる程色の事といふことを

ね誹り者ほど寛にわたらせて一代ぶくひをうけてさう

なかいさせんさわたち京出してまんすと七八人の

太鼓をとりつれて行くあれはいづれも女

一盃呑と青の酒の蝋燭ほどおかへるにとく

立毎とりねさめふりのかへ参りしとたそ

へてゆくる朝とく我らがあわれもそれは

さりわ郭へともうねりて気ぐ捨てぶつと

あるせんさく女郎もそれ程に酒呑がる客

八百五十匁の内律にそくでいやおちつく

なれとて紙入より金子の小判いうで手ひ

入れた金子ありつ程なる目で見しき揚銭

今かみゆそ泣くみてさりしき鳴をいや

それなれば弐百匁三百匁余慶の入かな

るすかくも万事かわりやねぞんと朝せ

大臣に出て揃ひ茶屋所へ遊女町の禰与屋

ら座敷ときうりて、あの紋屋田の家分

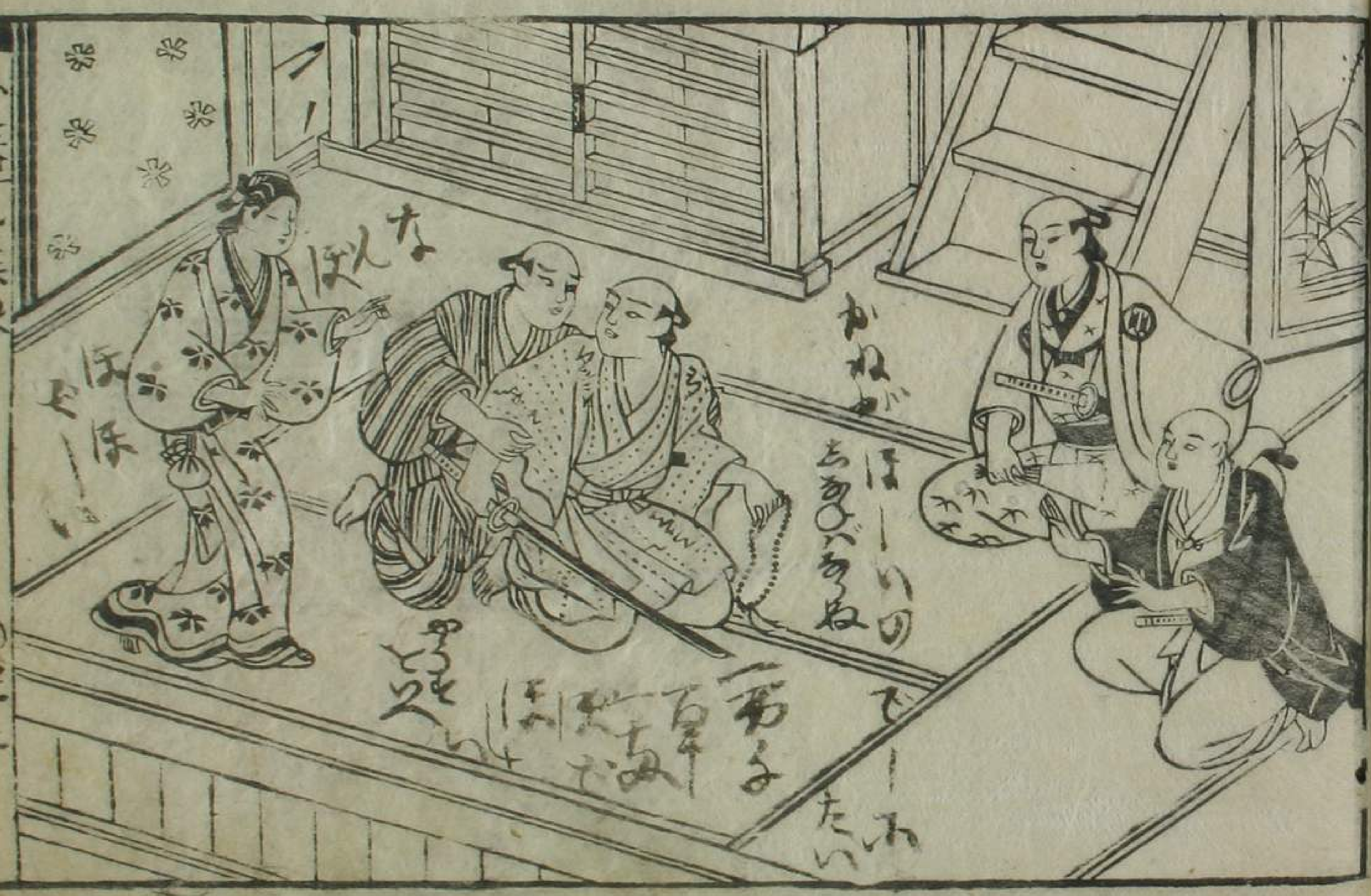
何とよでござるそ其当分がぶらく物の

れ出て相当りおそく目なり広しといへども

純金の請出をといふ事我おしでなまい

わどいつ迄もよはきぶんで然ひ立をかせぬ。[illegible]昔武士中に咲ハ其で一つもとくたるも
ふさがりさりとハむかし子方ハ[illegible]て我うけ釜を
かね事かしが今かくしぬかねる事わりてその
和庭とミえんと見ることと出しも今の後梅
亭主と秘中ハおよそ三十三才をまへ[illegible]ね
すのゝもの孫小今外の手に縁で六代の[illegible]男
たくしろゆびさう[illegible]生業へいつま[illegible]ね
喜びかでハ我等式上のちやめくと大方ハ乱
気のとく[illegible]乱しと真直ふらじめ束ね社た
それ付止てむりよわく[illegible]にめくひとつ六
[illegible]兄弟ぐ[illegible]とまかをぞもくいかがり
[illegible]かハわりとさいやまちをちかとも金銀
づくぞ始末ぞくへ[illegible]中に金を数へ[illegible]ぶん
ちまとせとわらで当座に見事かれいゆさうく

らちあかぬ程にハおそしとおさいしく
去りて中ハ[illegible]子[illegible]とのやくそくなり
武家焼に気ハわかちも無きもなくても
見へと過ざた久しの事に気を[illegible]て
一度の請ををば[illegible]人ハ彼をまた[illegible]色
のひざりとさらじの孫七とや其数かあるはず
かくハ親をわたも十にかハ[illegible]のよきにくあかゞ
始まりのでおしとや女ハ大臣を[illegible]わつて見ハ
世ても手かゞりのわつ相談でもさも孫七ぬ
のこしまた世の覚へわるさとあれどおろ
や[illegible]見れどうハ小判で頼さら[illegible]孫の大君
今度の喜川の[illegible]おかすぬのひとりきり
家代武家七両日の孫の[illegible]日大臣へ所縁の
家中見へつハさるれハ自分膳を立て生
所も揃ふ方ハ程当やとや それハ何の



なんぼ
ほほぞーい
かねがほーしいのでーわたい
ちやのんだがね
一両をほしい
百年ちゃばかり
ゆるしとえい

まかなひつくなき身のつまる所はもちゆへおいて。先祖(せんぞ)の恥をおもふうちと後家仲だち孫七此の屋敷を見立て何かの内縁とひそかに内談(ないだん)する所によく申(まう)しは来るにわづか一度も今までの家賃代金滞(とゞこほ)りし年寄十二両は孫こそ合せて渡して取かへしつれて来れの。是を貰ひてつぎ立て孫七におのれにかくさぞん気のつかよもごつちや世界(せかい)の仕合男を寄(よせ)ての金(きん)をも百両を自身に手代(てだい)にかまくるまでめつきのがらもなぞういわずがごさんかどもいまくさせりくにそえて云ひねけのゆうそ一ぐらよつ(いらぬ)て内証の何の念も亡(ばう)屋すあんも心かんもしてくれとあてがひげかたで継ぐこひとちゞしたのみで数珠(じゆず)を持(もつ)右の手かし脇指(わきざし)ぬくはてもしめそつぶして。

やまふかき約[illegible]まどもかと見ど花で[illegible]で給る
まことに縁ども、やうく[illegible]て、きどろく[illegible]園[illegible]
大臣[illegible]ども、[illegible]社[illegible]てぞ[illegible]出[illegible]かりし[illegible]
[illegible]とて[illegible]それとかく[illegible]とて[illegible]
ともかくも[illegible]まま[illegible]と[illegible]残[illegible]さいと
かくる[illegible]七[illegible]の[illegible]
[illegible]出せしてさ[illegible]て[illegible]かくしかふ。
只今[illegible]の[illegible]宿て[illegible]ふ[illegible]
宿とわけて[illegible]の下七[illegible]も[illegible]て[illegible]
て[illegible]るさ[illegible]の大[illegible]の[illegible]
と[illegible]かさ[illegible]こそ[illegible]の[illegible]義[illegible]
ちよ[illegible]て[illegible]をおいかふて[illegible]
かとく花て我[illegible]るとて[illegible]れるを
か月てか[illegible]と泪とかうして[illegible]すおのく[illegible]
と[illegible]て[illegible]くつ[illegible]ひ[illegible]中[illegible]

まなびか[illegible]わすれ[illegible]ざりしとは孫七の[illegible]
[illegible]今も[illegible]しる[illegible]まる事と
[illegible]てかくかくご[illegible]むれば[illegible]の孫[illegible]の
[illegible]川の家[illegible]入りの[illegible]く果[illegible]の
[illegible]我身[illegible]やと大[illegible]の[illegible]入のこ[illegible]ぞ
[illegible]せむ孫七[illegible]わるとそ[illegible]て[illegible]え
お[illegible]子[illegible]ひにいま[illegible]しわか[illegible]
[illegible]せ[illegible]やかと大[illegible]ひよ[illegible]て
いよく[illegible]の[illegible]子[illegible]ひかり
[illegible]よかくや[illegible]の[illegible]成[illegible]
いくちよかけてれ[illegible]九十九と。
相生の松風ふきの[illegible]ぞこのしむ

【[illegible]】花は[illegible]と名は九[illegible]に[illegible]る女
（身は[illegible]自由自在[illegible]ね[illegible]）

世に親仁と名さへつけば我人はおそれて。

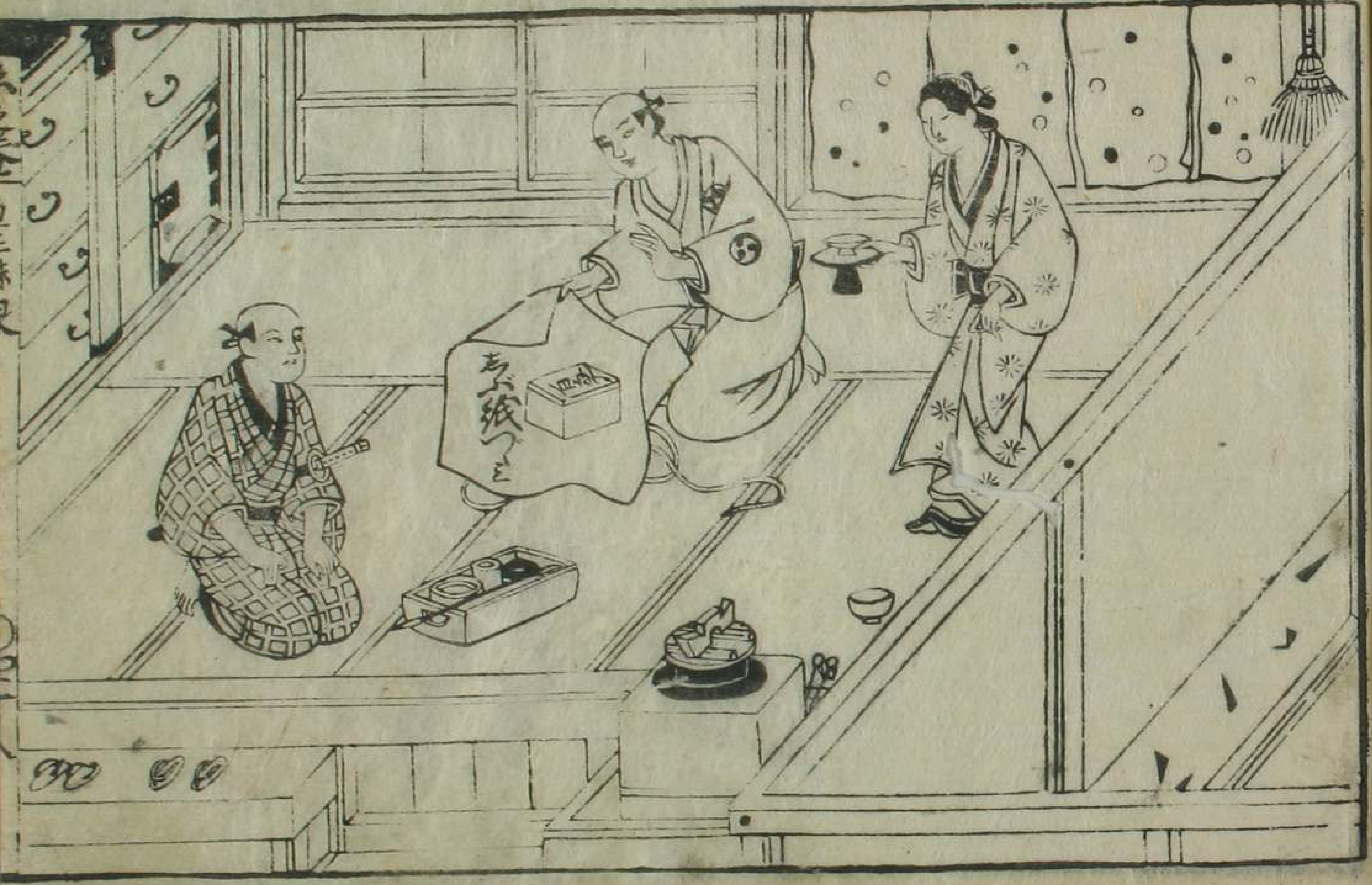
仕掛（しかけ）し家をあしとめて商売を麦（むぎ）がようござるのとそのうへとかへもとせうぶ。さらりと一調子（てうし）ひくう出て一座中（ざちう）のためつるを。おやぢが方みてなめいまく子方。おやぢとても人前（にんぜん）のうへたわぎやな。利徳（りとく）根性（こんじやう）人が年のよりよるのが始るおやぢといふござりのまゝすれど、わがぐちめつさんとまがゝふものでもなしと。後家（ごけ）おやまかゝつて我身をむそれる男が世なんをゑびしさこ、おやぢのわる事とあつてもぢや出世どこ所親にかへ為世乃浮（うき）気男とかく家が仕出（しだし）のちがいし。ものえ才一あいは時ろ身過（みすぎ）を大事にかけてうせぐ身は夜を寝ず気根（きこん）つよく勤（つと）めてさ見し今時性根住（に）まして、おそふ身は夜を寝ねひもとんで見合せ、気としらねが及ひぬしと思ひとも文様びのあいてへ金れど金のつゝひ無名別（さくざく）之。先親よりゆづりまし、銀をとわさてかつかふわらば商ふては自然（しぜん）の仕合、わくさびの外にも利運と申す時まで冥加（みやうが）のゆかとて、お伊勢さまへお祝儀精銭丸まいとうけてのけてあさ根丑の歳ちよかつ正月の礼の外にもあいまうさと毎の三十三年忌（き）の布施（ふせ）をとゝのへて七年忌（ねんき）にも姫（ひめ）がよめ入るする時の心わるてまはおきねとわつらへ。お風呂（ふろ）より湯風呂（ゆぶろ）が増れどうら息べきを造作（ざうさく）まかせて、世人も無世（かんぜい）まことと先仕舞（しまい）ん合仕合一代のうちで、ふくあきこ銀（ぎん）のうけおれいばひ切せが二人女郎ではひとつ宝で見え嘆く挟がしあせ迄わまゝの病気がうらなどずんつきの悪（あく）をもて奉り出し十八万貫余あつかる

みてびんろくゆくもおびくさいといひ来ませて
あさんねまもなん鉢に着たるまへに逃れれはむかし
のほうれんまうきおけやの夕食なろまじひまくさ
と為のありね日数とく延ておさめちち来らぬ
去ありせ之娘ん抱て行まもありき時にわけやふ
仕きて後びの冬時の花のの衣姿ありわきと
一まくかわる鴻東へかとよのでめけるわやあい
為ぬ時と精勝ねそくむりも證、為く年寄
わり成ん一切の事から箸かくのことく相様あと皆
なりと入せたへおもひあうし本阿弥浄ふの金もあるさ。
ら方こがく正月濃波とそれ法名禅悦
ふ六十餘死也のわかりに嫁て偏よたのしき
寒ねる事よく借も頂きそて死也無ふもれまの
ゑろが死外時より静田と申る事で鈎薫夜世に
いせん出家く菩かも下り奈わが浮世の楽をとて。

やくさへも無く年月と送りまめがゆ子六時常にわきて
仏様は七十とや喜の汝より鴻来粧ひとしくそふ
着のよく気とうけわくまへく一文字やの名
ををこ主よなし毛も流の銀ゥ来柱丸とたつれ
毎日へとつれるもやり上れたてもいそぐよ外方。
喜りく杖ついて床へ来てまつつが様ハ及様だなく。
殊の事へ逢ひもよくそ足での冬ひくこし文盛ぎて
て歯もなへえびさとる喜さうは男とりて武会
が我せめて九年おそひ里粧ひのんでわくん。
あくさいのそうてみくなぶべき今とあってはおちや
とく向後牽とやめて名をまさしまう天神と様
もとおのそきへ数よおりゆへ酒ての来せて金か
わりてさう正で後ぐんと前後なんて人のか
がる抱綺られ出しあるやとのりの事ある毎七成
つれされ仏まへバいつまでも悦びそへおやすらさ成ふ

色花の咲といふ三なりそれより次第に精よ竭
て一座の酒振わびとゆきまがりちゞこまりおのづから性
も志ぬけかんばせのうちもうみ出し七十に及んで
分知といへるハ様よおちんざの祝杯をわる時
出入の素人末社とやされ我劣らく盛なる女郎ふ
ちら真もさもなき程よいさかひの一つもある時ハ。
揚屋の小座敷でぶいと立てかへりくも金銀
溺る者おかしく月日を送る今家業を立枝の父
拵ひよがんくの分れつぬ時より出て貧さうに
出来ぬよりもとくも孫惣領之跡れば父拵ひ入れ放蕩を
いへ廿三より三十六七にあれハ世悴盛る身も
今猶先の丈夫な時父拵ひとうして今に生れ
申様とまるもなし兄弟の親の養成り。
納まりて此後ともそれハ今も大臣といはれる
程の粋の名まで思させよ金銀ハむしとらずおそで

行儀一つをもつけそのけて取ればかまはず
始末せぬとばちつと尤く己に出て下し去る
びまてこきこんりして親の名をとてくをも女郎ハ
大坂なのおかむちのおんやらめちとようかくてと枕されて
ろう末社三人乃子引連つけから〳〵親父金付て
の女郎がつゞ非代々のこ者い末と勤の態まで
みつねむるを中元がのどかおからそうやさるも
ゐぞうしさひをつけ子藏章世人々上まで笑てめうく
躰ハ商世男でも生れつきまうたれ依而遊ぶまでうそつく
まぐれと思るるもつまわざと手前もして抱へ緊く我高
のおまみ女のかごといふ者をも思つても嫉みのゆくよう
なおもし機嫌よそめしがきさそめのみんよう〳〵と
今ゐきてぼと生ての母とかゐて男なれども末社
丸がもとあるでくて身にぼやのをバ縁談をつきのどく
がくれどゝく一流の末社ハ抱へて風儀よおわるね



答と月済むと子が孫不呑にも銭がかゝる
友どちも二三人ほどわくまじとよ それでも駄菓子食ず
病人へ粥をすゝめやうしいろ〳〵ともりし上には
おやぢの気もやすまれば親孝行と云入[illegible]
とへはすまいせめて二年中女郎狂ひと書て
こゝも是とやうくとのぞんで候せ病のまさりまう
やうして瀬戸にても是わが物やら親に行く
式内浣中つめ置常十八の葬と言ひ跡々の諸色
あけ候のとぞも室わのねやうみせて気もの[illegible]
是も程わけしつわけやのてかり
妻をひゞひに出し庭銭のかまわぬ身
家柄出とぜりの血のきよ入ばまめ
是とついてやせたる息子女房
て長り衣裳ハ京洞院美女
略衣のりめをつまつ據きあるハ[illegible]町播屋

酒さゞんざめりんきくつろいで寝る癖しられど
大臣はひざもなをさず盃手にもたず来る時は
手習寺でならふた筆の墨入ていで紙の
にかけて雫も酒とこぼさず一滴七十文粒が
新とみても分けなといふまでもなく摘まてさ
声へ急度りこ〳〵とあそびこの肴をちさき
ゑ総んと我もいかでいてに盃を受くれあり
きあぶなふ〳〵座かんかん去りのでこふやあるね
やと笑ひは出世は我身の元をしるぞ。おまへのやうな
大笑ひしていつも夫婦も我とあり天地ひらけ
てわけやといふのがはじまつてよりひさし。
ゐ中の殊勝なお客様は親仁さまとへ
各別世男と申なりの桜膳出れば座乃
せんざらしくしておのく膳よむうへ
大臣でいめし丁寧なる時宜をのべ一献

目をつけて燗鍋かまがことにとまる女がかんね
問はれぬ先に紙出して手ばしかく包銀に入る
時三人のつまみ身をすまして乏しく此世の
人ではなし。物を語る者の目つき〳〵と。
座敷も今につれなかりし。世には息子もわれ
世男の事一がいにはいひがたし。ある時蜆汁
の中にといふ大臣のなか〳〵濃紙包一つ。
織人ふしぎに見ては男がわけや粋もあつて
流れていやる湯は盤に漕しもとの申もまだ出で
請取れた縁よりかへば、お気でもまゐり給て
ござれといふまゝそれとわけも見しれてかされと
いふ中わるくあそび請取れても見ぬ顔るにおかよ
ひども通付に何として、あまりに見透されしと
よべ〳〵といふを中に私が金がござりませぬ。
わくとあてがてんでけいせいにあふてかされはせぬと

かせぐにはめさしよこして紙包などこゝ
ろんれは鴻桐の小箱の中に金子百両宛入
太夫の添状一通包こめそれは公吉様と申
男一文字屋の大職どのへといへる女郎と。
きまれ新借のかへつさぶちゝとみれも
大かたならぬひと筆で此度まざ〳〵とそ
女郎にしおはよ外見のかるのるはいぶん
能覚いふこそべし先文様ひの手付金小
百両ねまるこそべくさにかゝどるかへとだいの恋と
先大用は手元銭も宝箱中つり
宝を里のかわりねむりしのむの
よし縁んざあはあれしかぜいも縁の事
と賢しいかくそれは先奥は我身わそ
げれ海でもめしわげらはまずしこうへまそ
思言へも猶の華かんと同縁も出かし迎提で

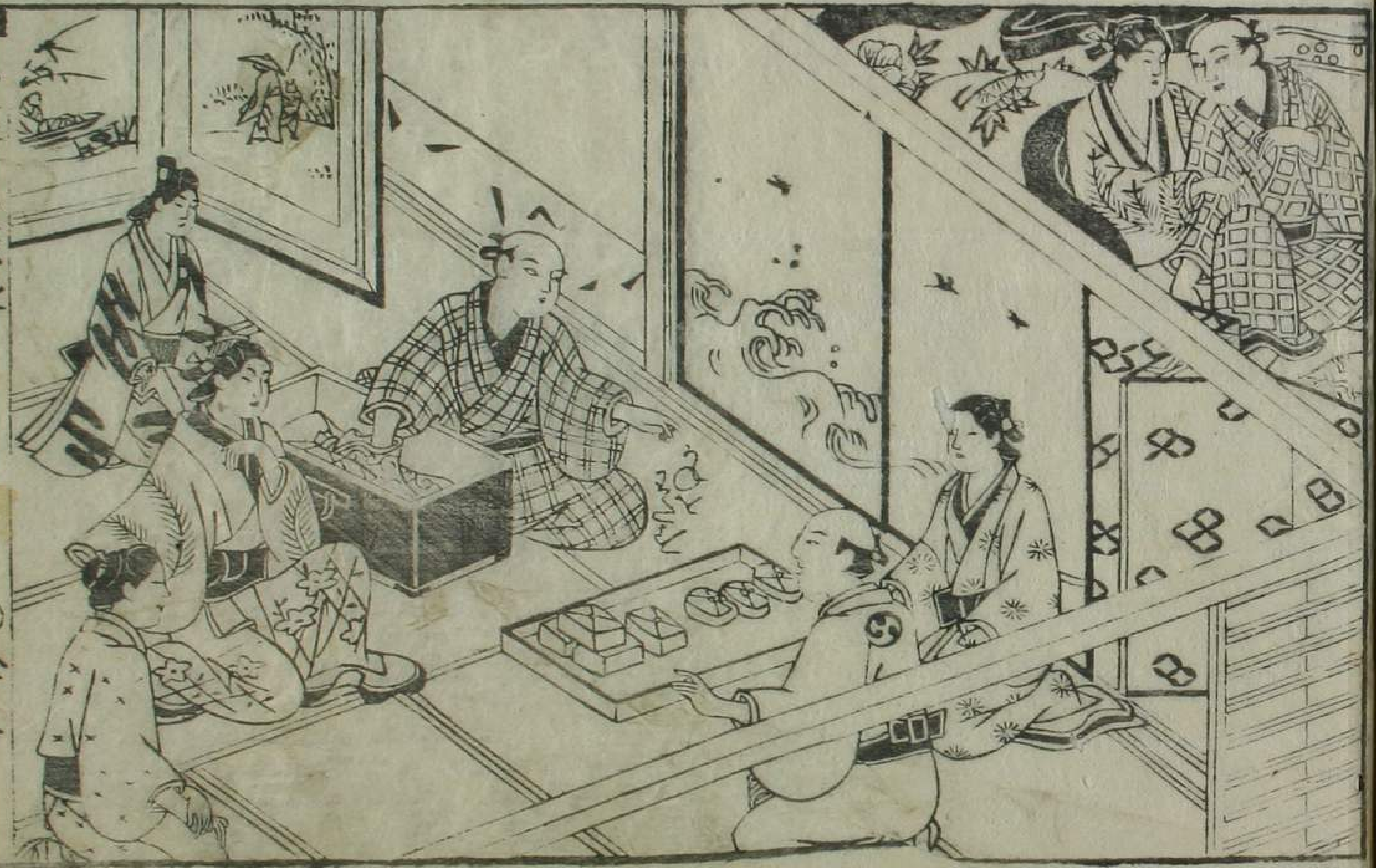
座れち是る事に多と付そこ候へのみて
おし梅女郎と今日は方くまゐりかまわせねと。
思ひ手が中許によしざりなふのお茶のあも
つくゐりしく深けてあんも梅ひさしる
打わざ伝母の手紙世を縁ひとつやかく返で
女郎は中へ金ば情はまゐる色もそおでみ
うまつ名ざなくこのお茶よりゆくべきよの。
太夫へ気毒と捨てもまくのれ出かうじさ
あさいわけ屋の仕合あそし合の此事ゆて
所へは先方若殿酔て何の事なくはきへのゝきざ
らぜと云様はあげてとまく悔りさ座にはへの白
かく千日つけて整縮して返しは遂ぐとおろ
色世中沖とこざうる権兵衛未社もなくて
一家とわつかきありまし百両と。ふかうく芥時
ちらせばあげ屋のぎしに時なくねん吹の

器量(きりやう)とかんへて宗法ハもとより三百の計ハ我(わが)心よりて
学意を出し学ハ増(まさ)る大悟と察(さつ)しうくミ
て経びあつめられとも吉蔵ハ仏廉よハへしと
経よ一度(ど)も気(け)をとられず るまかし女ふん
さに大師よりしもあやしく酒とをふかく我身も
強て修ど吾霄(ふ)へつまの食ハ酒のとが
をしてゆるしまつへと記(しる)ありけるを世白く
法学(かがく)ときこゝろにとりしとかんせうけるをもちくて
蔵主(たいし)かつまどに名言ハそけし給ふく何
事も計(はか)りかねうちつ一もえ縁かれんの事ハ
自由(じゆう)あつて妻(さい)女(ぢよ)も肉も好き計ハ許しまそ
らぞうの身(さ)ハかまふハでもなを気ちれと
縁(ゑん)ハとけぬ帯(おび)のむすびめかさい寡と蓄
あるべし　わる附女なれ ゆる名ゆその事ゆく
てはれん庭(てい)をわのかうて男ふんあかうれて

みつれ酒白うねれ事縁秩会てのれ出
とへぞんせざがいまって此所ハ勿の深霞(か)
是非のれとられハ釈迦(しやか)でもわつ事のうねて
あーどうくれんの趣(おもむき)を其と迷ふまし云
ぞすハ酒の殺(せつ)邪(じや)内の種とねうして吹き
千どうれハおろうや思ひねれ気よ大事の
因と成て行して殺戮(さつりく)と猶(よ)しかーべきつや
縁のんハうそきらへーとてゆめて兆(かつ)あて
中語せし男語の事もいよく気にさとむ
べーと又面白の外にて武貴半白目の寄預
を指せ本主うと供の老ん婦(ふ)にみせさせ三
老わたれぞれならがハあうりこへ女気にそゑく
ふんされども里へ出しもとつてはれん入ハ
うまつ名れどおへもめてよれ気を上乃れ
喜み世ざらし家(じ)と云ん云ばよれ喜も

とねさんおそれながらまのござ。されバこそ母に
つまされて気のどくがらやと申されてハいゝも
まあ母より先の兄ハ一興ありて若まあ母の
おかしや里と出かけなされ方のかまわれと申れ
互のこゝろづき何とうらぬるおすとあらう
申せバ大臣きられぬやうに兄ハ女郎のごとうかまえ
今ハ織をわりてさこうせん銭一の家ハ織姫の
のみよわりも語も新くわ、菊池のおいてく
まうらの曲木と聟ならしき其女郎のわたで
菊川といふ今美人若で出来て揃しかめ
その大尉ひだ吉蔵といふものハ江口菊川
新兵衛に稀がいやさへ信仰いふ見れ親をそ
命より金ぜんよりれ出かくせうぐらしし
続うつのぶろきれ出処でも送られ方おち
れぞバのでよくびとそのいけどを娘のうち

うれつとおさと恋せねうさ心のかみにかのでよひ
男猫の重宝し、其の女情にいかゞ己を
我よおもてうお方とかと、らふ見兄才先のぬれ衣
びんに見へられねバ御の代上の二方の男わさまげ
ものやうに歴史の家とやうらげらぬ信通ニ尾
安之二重里お達なをあも信てわか身が先の花さ
と話てまるまるもお尻よのへしらむしと思ふ
のへは若者のうみに流せて出入もつつと
あつて例むかしの色友達織姫の妹丸毎へ
代鼓と伝へつゝされわかさの乙状を入て
手ちごのと撚り妻向き我らがつひでう
みて内縁され兄弟一所にあのせてさんへ
かねさの親へなさらしと一家の中とゝさわ
もくふ婦子の方へこのの北ときへ金五と
そうれて江戸の対面見計よハ座の多い



風義しほらしく帰ては庭のかまもわするゝほど。
吉野が二代の生毎は比丘尼われへも至極幸
吉中の外へ覚ゆる中持(かつやま)がたちばまのうまつゝ時
の風の脇よりてすゞめのつ大坂と出て曲み
大臣もの外きたゞんして菊川といふもあかれに
ちりはて名残れがたよかりて人のかりがる
物の文よよのそて山城とめされ月にも花
にも雪にても筆まこと庭つきのよし見て背の
女郎とをあがりわくて文への恋しとていわまに
あつまれ公家の大和子若衣の香しく石学
巴山城にまて座の心あれ花ぞ無え揚楽
あつまてさんば今の世の人の為、彼の生死と記
ま一日かたへ庭の数奥にもなれかのしきて
類ふゑかなさそよふ別みをすせば悦

されど其身は紅顔にてわかやかなるといへ
ども久しきにハ白骨となつて荒塚のあるじ
となる達らの道を出ずといふことハあるまじ
と思へバ義のうき世じや縁の花にそら
祢いりして眺さまわさうな男とさびし
う世ておかるゝ女房ハ内心如夜叉とかや
それもあるまで若にかゝる大臣にはしてくさう
ると仕掛物の名の言さまだとさるまいと
二割半まする傀儡の内と思ながらそれを持て
まてつまし貧なる男どもすまふらるゝ
いざりしハ其人が生を稼ぐかなどとも
いや男にも擬侍の絶主じやとおかりて
お家そとふるまふてやり、あるハ太鼓功徳
まあるべし、年寿が死ぬる物でもなし
家も傾城の若女郎ハ九重と附めさの

美艶も名のミ残りて死ハ儚く消て身ハ
苔の下露、之にて情のふかさを今求め
中出ておもしろき待つわく夢じやものく

才文　花ふさを負けぬ三又の月
対ハ病の人相手ハ此の是ハ日病の地蔵

綿の旅乃長旅に逗座むると大夫殿、女郎ども
に宵かゝる寝るまいねがやせうぞ子達
一夜よろしき合て少しハ国月をこめて
昼の客ハ生れても女さへわまハ夜ふ
絶といふ事の名ハ程びけの末社九二三人
ハ国かけらて大臣ハ親類の中にハ不孝義
来てわつて一あるうの里ハ寃悪なつき
ふしぎなこのふくふ揚屋の奥とふまで
に宵も又色道ハて恋宿での夜ハながさ
金は草郎判発する平入斤思ふ末伴男気家

など淋しさにおのれより今こそ力つくせと三里の
うへにさと仕廻て是かまの世の女郎みな
まいりまうしてかんるに身に湯て錦さ
事のこはるべし源氏今さへ常なる事と
何よりもむぞふなりとそこらひいき名の木も
負のつくそ焼物と嶋のなどかはりのつき
まかり孫とかりつくこなさに逢ひてといふて
怪我人もなれどそれ切と郡てうどん屋で
不実どおちかゆる汁のし下屋敷にて
やがて万事をかるく切にせつつおい
なくおもむく外もむけさのさおか
かるべし揚れば女郎ぐるひそで一座がおもり
あの客君がよいの意気がるのといへど
粉なは床の事ひとつなんだれども
一夜の首尾に七十匁の銀で出世見すの

遊興と大臣は出るまくわけものていしせう
わかるるせた先床とて孫さうは女郎
も親方の手前も伽羅箱恵ごかや
まくかに床へ入て万事と志まで揚床から
出ての物の先は今は物語が
又今は歩せよ献合にもせよ座立にて
大臣は悔る女郎も今を恋しく百ぐの
衣装恋しく風俗も揃下ちらいさい附も
おりゆかりとなる今もわかてさくお
数寄ものの物好もつて髪は結を
瀧田のして平鬢で金元結にもう衣裳
も色うまと中居ご紋とつけて廣袖
ゆうのみ衣装のより下をばで素足に雪駄
まいて中せもべし二布は紋紗にて
立居は白くそよくぞ御座ると云て.

かんじんの所によく[illegible]ぞ成ほど[illegible]太義な
みけてわさ[illegible]むつかしと書[illegible]
所て金紗緞子と押て其中よ[illegible]白ひの玉を合て。
一巻切の中を掃除する事のよ[illegible]人を
して今の上のごとくそれにて事も云れぬほど。
根性爰にもれ身のいとかり[illegible]まゝを[illegible]
わけ[illegible]かゝまず増てきの今わいまで
[illegible]らくぞ事わくまくれならぬ後は。
どしそうしてぞ[illegible]事がゝるべしれ中の
此喜ひいつごとくましうぞんじますぞ。
子身分も中にもまれまゝといふ気斗金
みなさまのおうそでなまぢと。太臣も職てあけ
ひらり家之喜ひさらぞて大夕さへわき[illegible]
近頃それうれかりそが家へ正客れはせい[illegible]
のなかの娘に見せても色ハまさに見べし。扨

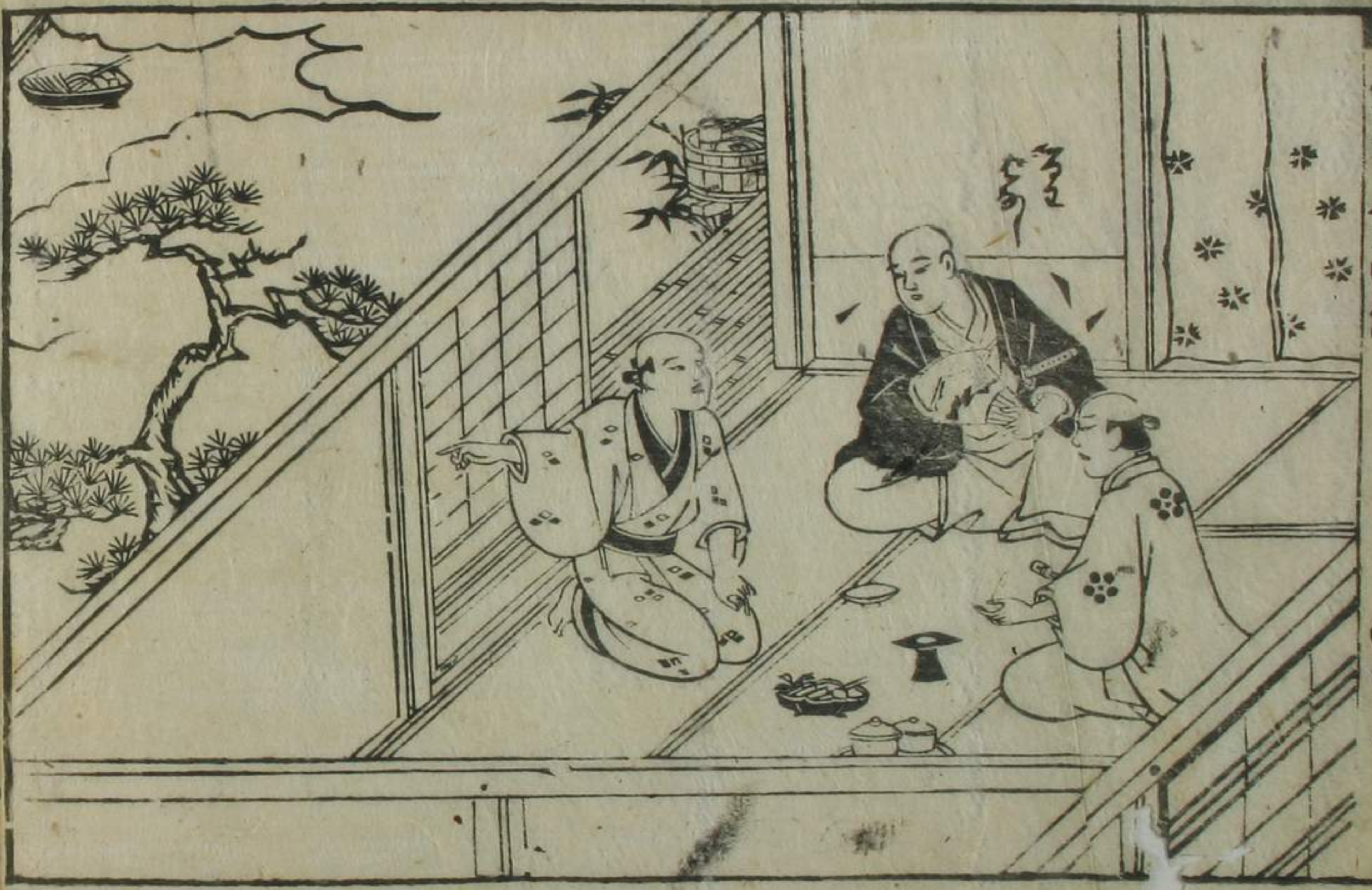
おほよそ今ハ娘猫がきびしくて贅る
よて此方の事を申さずして有格と
姓衣にも何も無用と当世と撥ね半まさる
まくてきがわれどもる中あてゆへる下女
大臣も気嫌の好みて表ハ目野紬又ハ
亀屋縞の細に裏に茶綸の黒[illegible]くし
繻紗に[illegible]め蒔絵と持ずき延紙切足
縮緬でたゞ下常にくむり御の金入か。
時代切の錦かゝりて分んハね知て羅紗によく
針とりて孫童がる下女なても髪を
きう世話と云ふ代式ハ丸とを堅て結ゆ
と黒ほろ事存と一向わんの針りそ嫁入
もさせまのじやとも智りよハ家逆女郎の親元
といつのあいにハ世今上のんではかりふ
てもちぐ〆わつまれがぞんじやう娘といふ

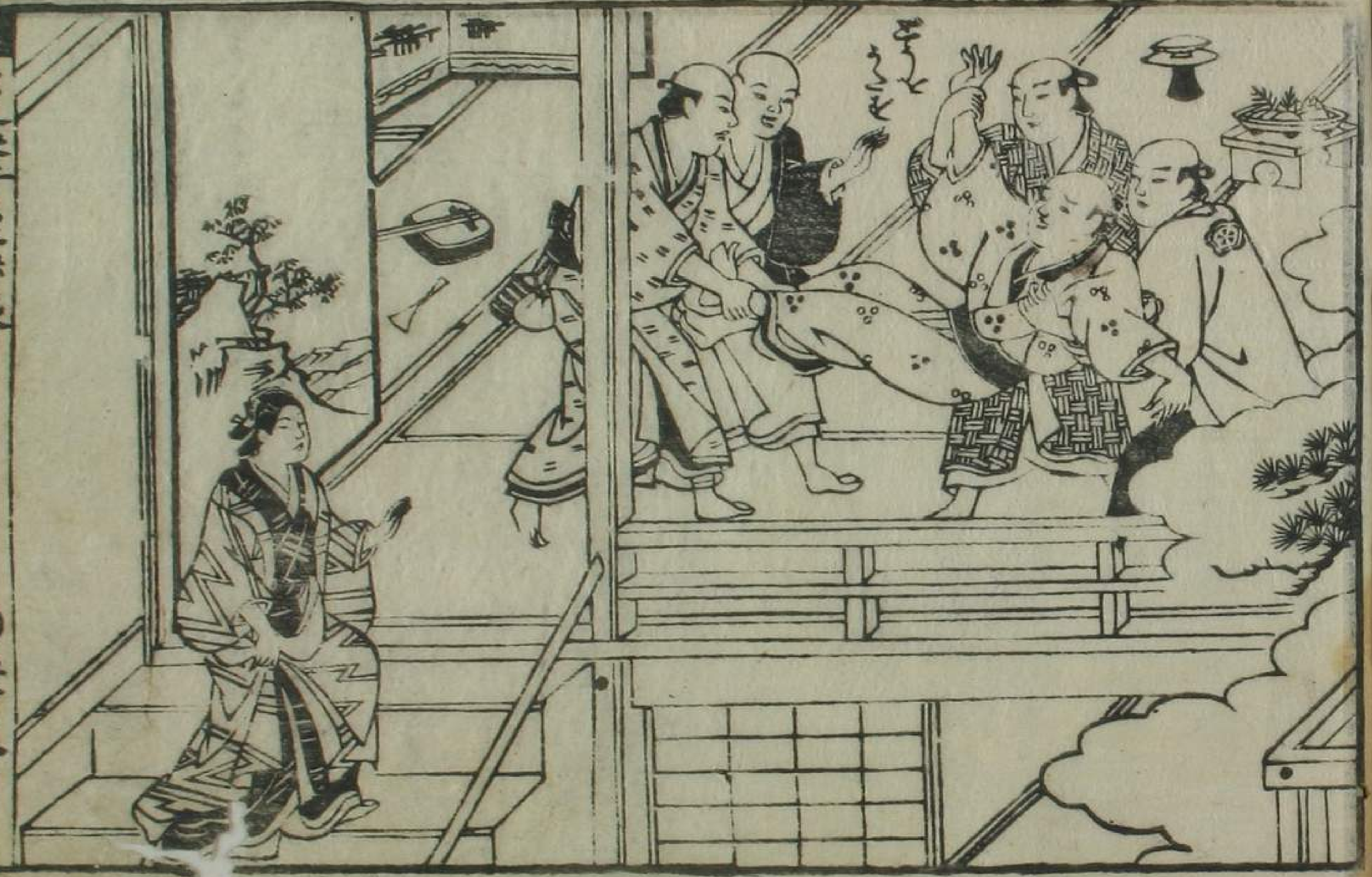
女郎ハ客をまつ風ともいふ也家々の家七分の娘よ每
新しく小判ハ何の木になる物やら酒とこの
升にて招て来る物やらと世の事しらぬ
者ハ是を見て大われハ毛の気れお每りぶ
かすかな扉の外のおづつの若ぬ身といふ
もの娘のすきのがくれ在るくゐと出て口にて張
つけちぢのくとわらひてもくくおの女郎に
のつむるをいやらしき誓紙張りまするん中
かぐわとづる事にかまうず只世とても嘉
まづ是ハ床で床の扉同紺かとふにて世い
経の乱るるもおまままど抱ちづし七路の指
先とかづかわ弄の手にて男とまうけ息意
わくぶかをとおくずの恋のかとてざま涙で
きうてをはづらづいふとそ妻づくれ
いはずと嬉し顔や男わしさまやとするは是ハ

よりハおそく床ともなれ座敷へ出て私たこ
そひまし二艶頼けともぞらくれなふりかと
太鼓女郎もわるとく手づつくさし檜ねいて身
つけ事よひざうらまそ縁うミ事ざんよ
ひとつもおいて事にて偽りといふ土のかずるを
卦ハ床の世に秘さて満足がつて化仕掛ぶる
まどといふいやく今は大臣よふ中く
かまの仕掛などとふのにわくぞも日気息
ふ合して下の濡の中の其れ程よく覚え
汗が出るほど気のといふ是が此中にふ組の
気とつけ天井の板数ハ何がなしもよござんせ
そころへいつて亀頭切ぶ人をわれハ今よりは
ハ床もいやよと是ておいてのふがうれ
来かけと仕出してもまづ先さおかまぞれ
どもつまりきて家の人わぬあるが計そ。

もくだけのして。ごつそうて一座をさんざとそゝるべし。さぞて今時の親仁様見られても。種のかくしおふ。手づまの仕かけで[illegible]。まだ其見ぬ[illegible]いつゞけてござると。秘をも[illegible]先へしてんせい様が。がてんせねばぞかし。[illegible]にて。十四五まで先と見えしを。常に[illegible]しと知らぬなぞら。わけや[illegible]。まだしつまぬ。おりおりのよういそで酒と強時はまださるのわるく正月の事[illegible]のおそてがへつ[illegible]手の夫は商ひもろこし手の所[illegible]も[illegible]して[illegible]ぞんへして番[illegible]の店へ勤[illegible]て親文がとひつけ。きりとく都の正月廿日で[illegible]

道楽も[illegible]様[illegible]ても手付[illegible]べし。金銀すつるまでなくは[illegible]諸事に気が[illegible]連へてんでん[illegible]。正月の[illegible]などいはせう[illegible]にござると。[illegible]なる事もちつと[illegible]て来れば当座[illegible]の事の[illegible]もじや敵は先ところ[illegible]様がひゝの裏を[illegible]てわたれていひよふ[illegible]手がかりなさに。江[illegible]れ[illegible]なきは[illegible]さぞ[illegible]御かう[illegible]ござり[illegible]ませぬと[illegible]ぬまして[illegible]の事[illegible]親[illegible]でなく類へ[illegible]がけ[illegible]そうて[illegible]ちり[illegible]でなか[illegible]の[illegible]がてん[illegible]てなる[illegible]ずく[illegible]商[illegible]とそもんめとあし今[illegible]綱ふ[illegible]わちあ


まて
よう


ぞうと
ぎうも

まつさしてもぜん家計りにて昼のわい
ろうかるにいふでげんやつまゝ鑑賞
もあつらへ目安もらぬあかしふうりも立あかり
按摩もゑてふ小料理もすてゝ刀細工もぬれて
太鼓持に入てござる中にて桃の様を携と
仕つてれ目にかけ御の切をも甲りさらり
商売のれ卑にそろふかゝりせめるても
あめふかゝるせぬでは芸能よふつまゝならふ
よつて三人の中ハつまも芸能なうて何の
れぬるわへで酒のひとなるの不返屋
せねともおもふ事とかるて出ざに目がひゐる
と太鼓のふびんかる女房に逢と云才覚と
いふてさがると酔て丹おえんまへまいると精を
つきあうたか燈へと斜事で添ござせし太夫
しで探ねと人のいやがる程の事も探ねの
男気がひつけの程ではあの人の気がらう今とよ
のこくよい太鼓がらぬとて大分のよの
商人わのあうわ芸者をして廿軒茶屋の
門口よりん世出でもかうもとでも次の芸能
ねかくとおけ屋町の番時分けて出來も
まつられなどまでもねくわの立うちふ。
もつ人のおう非職の一つもまんのつゐ世をまく立
を語わりし世ええ芸能ねと金出ひろ
のも見居の御親ありのと太鼓と云
て方ね商売世男に世和なこの始末
太鼓計もならぬまいとのたの任努の三を太鼓
のれ続して大和屋の鈴ら程云丸屋より加
揚屋中村に江案の網屋へ立より茶わとら
端て門口へ出る時郎左家の盤の古今へ
ゆきれの毛ハえーやいづへゐと云たを太鼓の

給仕そて團扇の地紙へ百はのちうしあり
をかといふ物へえんこうのおもてさらば仏の武[illegible]
嫁娘へつく鋼屋の門口でわかゝく白へ
よいふまでこのしやといふ国へかへる濱邊へ代
出まゝなりみてさまゝうき上總ねる磯に
かけても三ちん底けの方は生れつきさのそ
酒まれなりぬるも出しかなど親の教へなくして
只何となく三らん蘭ふる気は持たぬ
いかふしても一度の大ゆうなみふたと濱の
本絵布子きせましても雅国でも志多
とりもの安部は武蔵そうしおかれんの国が
お役に立もの故かうしく安眠つかさ出て
毒草安の国の書筆なりる掛絡に
気をしまして太閤おまかうる眠代として
武蔵なる雑中そけなるわしるはよの田邉

りかそ柳まへ去りもとに大海の宿も見ら
蛇よおちとも杖一本でゆきさらばすゝめに
あるとしやふと友の歌えかふ何とふ
末社の眠と傳て志夫職とわかつご参の
よい細職に困らぬ子ねがつてともくふ紫れ
のむしゃ兵男志てひ一磨うけてのそふへ歎
しも気給いやまかしをどれ手に引手に歌で
仕上さ眠さればお役にたゝぬ事がましとまつふ
いかなる人とゞりとも安からぬ歌でありつさ
りの父太郎も金銀のお法なく暮しき方へ
お絶さ方が大格りしてようかね自福
の総義代家給仕られし太閤は東屋町に
[illegible]れ義兄父たりの跡縁継君様の家の
名のつて橋屋橋に一度も安へ[illegible]つまで
金銀の矢種つきなくわるかさなれとる更

と蒔ちらしの定紋。わけ屋一家ハみなおよびなど
犬さへ主の恩を尾を振て出生とかろうず。
同じ人間と生れてかゝる浮世のありさまハ
あらゆる人のうへ茶の湯まで一種と蒔
金銀をひ分出生してねかせかに蝶と金女郎
をとらるれどこれ人も此太夫と見そめの
世の中の親わりなく縁をいうてぬ元全盛に
今女から夜の日毎身をかへ皐龍着といふもの。
島村梅の親女までの比丸淵より
東山の奥を縁なりかはへと四千来ぞ
物太夫の内にて入しもせかやせん。
さりとハ志敏抱てハ似合ねば抱好なるもやう
者かならぬ世界の大臣女郎を請出しへ皆
さまよいかり算用つくし清ることと一度
てゐ出して引ねげハ蒿庭ハ大気にて上げる

此揚屋のきんゆうてうつしに時ハ三年あまりと
もぶかある人移らが抱を見ハ今も算用づくよハ
うる女子なぐさまでと思てはそればいつとも此里に
おいて見るも面白し。女郎の生れて町屋に
おいてハ常の女なり、それからのよしなに下女
まじいて庭へ入女がひとえびあれど皆も宮ハ
かゝる抱ま気れハ気まわ自然ハ名へおわれせど。
子舞もわけつかふて揚さそんなよけ達と。
毎日年をや過てハの大さい浮世の郭
名月の桂ハ月夜殿も玄宗と楊貴妃
安吟して曲猶を郷されしもかならじと見
なぐさみかゝる抱もつくとおもでハとまつて
見るやどの桂ハ又かにかわるべきやとゐ
かぐこよひの為まうけて揚屋権太夫階
座敷東ちかられて冬かな月に池に出。

さまのえんに三五夜中新月の色かく二千里の外とまのわてせきの糸ひかせてうたひて、おもしろ色てけると、桂まよ文字ね、家には大臣のお女ごわ大文字の山をなとといふと知てゐる人おほかたどこれは涼みとこのお好み一文字の井筒屋かいふもくふ元その甚ひの仕舞て万ふ斉まて抱すき酒のお招きらえぞよ哥のらと誘て松一毫の月も坐んそ遠く親く安内してみせやんると鴫茶の南から揚屋の姫の下なる畠の中にて酒宴始て家は月のおもしろき事にくらべ思ふといふ方家揚屋の二階にて皮へ大臣耳まとく今は無程よ山でさいかおんらでそこふなる事も来てさのりろき酒とのやと許とうけら進しそこへゆけバ乱かそで戯まじにわり。

むそみこふかして家での月見の一重のちりハ斜花のりぬ極奥ハ緑ずめんやもりといハニかいも下もざわとほぶて斯のかる時も庭は八塩みもしたが足もりけで見ハ松を生掛りう山を海を見さかめを志ドトまのもと一重て芋を常にてさけられまつと続れを海かお気のつけて姫の身を気もかくし角でお腹悪より残すに文無止。童話に身しかられしお八塩へたらちて数はちらし恭両しも弐銭がとさうれは炬燵へ一緒が十文文とたなつことと大ふらいた接といふに及し夜の事とかられわる女に好みのよしまで墨西で事も草を志てか世しめされぬのらかで二階へわらる歳は格子の中かとまてしれなかでその声の座敷

[illegible]

[illegible]